

観た事として、非常の好奇心を以て迎へられた。他の餘興は取立  
て云ふ程の事も無かつたが、當夜演じられた茶番の中には、同島  
知事を諷した物が多かつたのは、鳥渡注意すべき事だと思つた。  
殊に知事の甥とか云ふ男が、ギターを弾じた所が、聴衆一同申合  
したやうに咳して、何が何やら碌々聞えずに了つた。外國でも隨  
分思ひ切つた妨碍をするものだ。

夜の十二時から椅子や机を取拂ひ、ピアノの調に合して舞踏  
が始まる。我々も矢はり不器用ながら跳ね廻らねばならぬ。

加之も窈窕たる美人と相携へて踊ると言ふに至つては、聊か閉  
口赤面せざるを得なかつたが、好加減にお茶を濁して引退る。兎  
にかく其夜は盛會であつた。

### (廿六) 猪狩と鹿狩

廿三日、本船は再び長途の航海に上る準備として、淡水供給の  
爲めに島の東岸ウマタ港に廻航する事となつた。

アルバ灣一週間の碇泊中に、乗組員一同は南洋會社と清水商會  
から盛大なる二回の晩餐會に招かれ、在留の平山芳太郎氏と羽生  
商店からも多大の歡迎と、種々の土産物とを受けた。長き旅路に  
疲れた一行は、同胞の温き情味に深き感謝を表して、正午頃に錨  
を揚げた。

同泊のサプライ號にも信號旗を以て告別すると、先方からも安  
全なる航海を祈るといふ餞別の挨拶があつた。

船は港外に出て、島の南端に廻ると、スーマイ町の断崖は伊太利の古城址の如き形して萬頃の波を支へ、宛がら白馬跳るの壯觀を呈して居る。三時間にしてウマタ港外に達するや、假碇泊をなして直ちに端艇を下し、淡水汲入の法を講ずるなど却々忙しい。僕は閑を偷んで上陸すると、ウマタの町は人家百戸に足らぬ貧しい町で、背後には六七百尺の峻嶺を負ひ、一軒の雜貨店を土人が營んでゐるのみだ。土人は逢ふ者毎に怪訝な顔して僕を顧るが、不思議や彼等は何れも鼻が缺けてゐて、中には顔の真中にポカンと穴の明いてゐるものもある。町が山に至つて盡る處に、一軒の茅屋が海に沿うて建てられてゐる。これは此町唯一の學校で、先生はイングリシユと云ふ水夫揚りで、腕には文身をしてゐる。

先生は學校の隣に住んで、首府アガニアに通ずる電話を備へ、又た醫師をも兼ねてゐると見えて、不完全ながら薬局もある。

時恰も放課後で、午睡の夢に入れるイングリシユ先生は、僕の訪問に驚き起きて迎へたが、其談話は目下の學童十六名で、教室狹隘の爲に午前と午後の二部教授をしてゐると唯是のみで、別に教育に就て主義も意見も無いらしい。

由來米國政廳では各群島に對して、餘り教育に重きを置いて居らぬらしい。グアムに來つて此感愈々深きを感じる。先生は教育談よりも銃獵談が好で、附近の山々には猪や鹿が澤山棲んで居るから、若しお望みとあらば、案内者を紹介しても宜しいと云ふ。波に舟とお願ひ申し、更に明朝を約して歸る。

イングリシユ先生に別れを告げて海岸に出ると、夕日は西の空に茜を残して已に沈んだ。夕闇に灰白い砂を踏んで辿り行くと、前面に當つて西班牙語の歌を聴く。

Adiós vida, de mi vida Adiós entre los dos;

Adiós Englata querida, Da me la mano adiós;

『戀しき佳人エングラタに別れ』の哀歌は、餘音遠く流れて夕潮に響き、遊子の魂ひを搔撿るやうにも感じられる。

聲を便宜に近いて見れば、歌の主は薄闇に目ばかり光る土人の女であつた。

歌は西班牙領の昔に傳はつたものであらう。

彼女は此の清く美しき戀を如何に解してゐるであらうかなど、

考へ乍ら、僕は砂地を行つ戻りつ暫時は去るに忍びなかつた。

翌る廿四日、勝伯は實習生四名と僕を加へた一行六名は、イングリシユ先生が特に選んで呉れた土人を案内者として、猪狩に向つた。案内の土人は三名で、舊式ながらも一挺づゝの銃を擔ひ、又獵犬と云ふ程の逸物ではないが、兎も角も四頭の犬を牽いてゐる。

この人数が相前後して町の小川を涉り、メリー村に通ずる往還を右に辿る。約半哩も勾配急なる石高路を登ると、丈餘も生ひたる萱野に分け入る。不知案内の我々は西も東も方角が解らず、唯一文字に土人の跡を逐うて行く中に、僕は靴の紐を結び直す、此僅少な時間の爲に僕は一行に取残されて了つた。

何分にも草が高いので、一間も後れると忽ち前の人を見失ふに  
 は困る。僕は慌て、其跡を逐うたが既う及ばぬ。幾度か呼でも叫  
 んでも應ふるものは山彦のみで、重い沈んだ反響は徒爾に深山の  
 幽寂を破るの外何の効もない。日は已に高くなつて燬付くやうに  
 暑い。況て草いきれで喉が渇く。何は兎もあれ舊來し道へ引返す  
 に如すと、今度は逆戻りに走つて見たが、何うも方角を誤つたら  
 しい。殆ど途方に暮れて草の中に突つ立つてゐると、遠き溪間に  
 當つて四五發の銃聲が聞えた。扱は彼處かと聲を便りに辿り行く  
 と、果して萱野はこゝに盡きて、道は平坦となつたが依然人の影  
 は見えぬ。喉は愈々渴いて身體は疲れる。汗を拭きく見廻せば  
 數十株の椰子は空に聳えて梢には鈴生に實を結んでゐる。靴のま

まで樹に登つて、大ききうな實を三四個叩き落した。  
 椰子の實を叩き落してサア占たと思つたが、生憎にポケット  
 には小刀が無い。喉は愈々渴いて来る、仕方が無いから肩にした  
 る銃を把直し、椰子の實を的にして引金を曳くと、流石の硬い皮  
 も戛然と破れて中から旨い汁が迸出る。慌て、拾ひ取つて一息に  
 飲干したので、少しく勇氣が出た。  
 再び遮二無二進むこと約一時間の後、漸くにして今朝來た道に  
 出たが、疲勞は愈々甚だしい。  
 山を降りて土人の家に休息して居ると、其日も暮れんとする頃  
 勝伯の一行は犬を先頭に歸つて來た。  
 獲物は猪二頭鹿三頭といふ好成绩で、何も意氣揚々たるものだ

僕は右の次第で、唯だ指を啣へて其の功名咄を聴聞するのみ實に残念至極と嘆息しながら、阿容々々其跡に尾いて海岸より端艇に乗る。

船橋に立つたる當番は、斯くと見るより傳聲器を以て結果は何うだと訊く。

信號法に依て手振足振で大獵の報告すると、忽ち其事が船内に知れ渡つたと見えて、舷門には大勢が笑顔を以て迎へてゐた。

(廿七) 琉球が見えた

此夕、本船は長途の南洋航海を終り、再び二千五百哩の海路を本國に向けて歸航する事となつた。季節風の工合で目的地は琉球

那覇港と定り、イザ出帆となると、帆を捲く者や、錨を揚げる者は、威勢好く甲板を縦横に走り廻る。英吉利船が故國に向つて錨を揚げる際には、勇壯なる「吾が郷土」の唄に合せて鎖を捲くのが習慣であると云ふが。我國には斯る唄が無い。併しエンヤラヤの掛聲は例よりも勇ましい。夜は十時、陰曆十二日の月が海を照す時、微風に帆を揚て本船はグアム島に別れた。

島の山々は月に映じて墨繪のやうに見える。これが南洋に於る最後の夕かと思ふと、自然なる離愁は胸に湧いて、夜の更るまで甲板に逍遙ふ者も有つた。

翌る廿五日、船の動搖に殘夢を破られて、起き出づればグアムの島山は片影だも見えず、身は既に漂渺たる太平洋の中の人となつて

ゐるのだ。

貿易風は少しく風雨氣味を加へて吹き暮り、船は百七十哩以上の速力で走つたが、廿七日の正午よりは風全く風ぎ、海は平かにして、身は白雲一片と共に悠悠太平洋上に浮べるのみ。風と波とに運命を任してゐる帆船は、此の場合には實に齒痒い。詩的に云ふ『平和の海』も、今の我々には頗る苦痛だ。三月一日の朝、徒然の餘りに釣を垂れると、四十貫餘の大鱈が懸つた。こんな事でも無ければ退屈を凌がねぬ。船員に取つては風も風雨の中だと云ふのは無理もない。

此夜から船は蒸気を焚いて汽走する事となつた。

平穩の海を汽走するのは又爽快なものである。青疊の如き太平

洋を機關の音緩く北西へと眞一文字に走る。艀で剪る波も二條の長蛇を作し、其末は柔かき腕りとなつて徐かに消えて行く。夏雲は中空に蟠まつたまゝ動かず、所謂乾坤日夜浮の趣がある。斯る航海が二日間續いて、三日は桃の節句、船中に白酒や菱餅は無いから、例の牡丹餅の御馳走が出る。

此日は朝から南西の風が程好く吹くので、午頃から機關の音は止つて帆は捲かれた。其頃から温度は急激に降つて八十度から六十九度の寒冷となつたので、俄に夏服を脱いで冬服に着更るなど、浮世の外の上でも何となく心忙しくなる。

四日の曉から晴雨計は非常に降つて暴模様を示したので、帆を絞りハツチを密閉して、風雨の襲來を待てゐると、南西の風は東

から北に廻つて風力は漸次に強くなる。午後二時頃から雨は横に風は逆に襲つて来た。淺利船長は低氣壓の中心點が右舷後半二淫の海上にあるを認め、其の危険を脱する爲に俄に針路を南に轉じた。船長の談に據れば、太平洋上の航海で如何なる暴風雨に會つても、其の中心を脱出し得れば、何等危険は無いものだと言ふ。斯して無事に航海を續けたが、此邊りは既に東北貿易風が跡を絶つて、風の方向は全く定らぬ。随つて帆を捲いたり、絞つたり、風の向を見て受替へたり、甲板上の仕事は却々多忙となつて来た。斯うなつて見ると、貿易風の難有味が今更の様に感ぜられる。五日六日の兩日は、頬を打つ風も冬季の空ッ風と變つて、帆綱は絶えずビュー／＼と唸る。浪も漸次に高くなつて、船舷に上る

大浪は白沫を噴いて甲板を洗ひ去ることも珍しくない。七日になつても風は止まぬ、寧ろ益々悪くなるばかりで、再び蒸汽は焚かれたが、明日は琉球へ着くと云ふので、船中何となく賑かだ。八日午後一時頃、水蒸汽の少い透明な空氣を通して、沖繩島を望む。碧海に梨地を散したやうに點々と見えたる濃紫も、夕方には一個の島として水上に蒼く浮び出でた。生憎に風の方位が悪く夜中に那覇港に入るのは危険と見たので、此夜は甘淫の沖合に假泊を試みた。

(廿八) 琉球見聞記

琉球！ 琉球！ と云ふ聲は忽ち船中に傳へられたが、何分に

も此日は風の方位が悪く、那覇港に入るのを見合せた事は前に記した。

サア然うなると明日が待たれる、船は九日の早朝に汽走して、糸満の鼻を廻ると、刻一刻に近く島影は望遠鏡の力を借るまでも無く、甲板に上れば手に取るやうに見える。

周回二百五十哩の島は最高の山も尙三百尺を越えないので、起伏緩かにして優しき姿である。

緑の樹間から人家の煙たなびいて、港内にはジャンク型の船幾十艘が西に東に走つてゐるのも、南洋諸島を見馴れた眼には懐しく、館山港出帆以來初めて廿世紀の天地に足を容れた様な心地がする。

應て首里城が見えて、那覇の街が服前に展けると、河口に投錨してゐる汽船に旭日旗の翻へるのが見える。彼方の丘にも此處の森にも、白堊の建物が散見するのは島人の墓地である。

黒田漁撈長の説に據ると、琉球は墓地の國で、廣大なる墳墓は矮小なる茅屋と相列んで一異觀を呈してゐると云ふ事だ。

斯くて本船が錨を投すると、水上警察署員は時を移さず船を寄せて來た。

八千哩の航海に疲れたる我々には我が巡查の制服を見た丈でも先づ嬉しい。況て日本語を聴くに於てをやだ。「未見故郷城、已聽故郷語」と高青邱の吟じたのも、恐く此時の想ひであらう。税関の手續其他も至極手軽に終つて、午後四時から半舷の上陸を



許された。  
 上陸許可を得た半舷の人々は、百日振で風呂に入る事が能ると云ふので、準備も勿々に端艇に分乗する。  
 僕は勝伯と共に三號艇に乗つて、港内の川口棧橋の石段に上ると、左袵に法被を着て、竹の子笠を眉深に被つた島人は、人力車を轆きながら右左から押取捲いて「クルマ〜」と勧める。此方は別に何處へ行かうと云ふでも無し、兎も角も足の向く方へ歩いて行く譯であるから、車などには一瞥も與へず、サツサと歩き出すと車夫は煩さく躡いて来る。氣の早い横山實習生は「風呂まで行れ」と云ふので、一臺の車に飛乗つた。我々は依然歩いて行く。町は非常に狭い、人通りは非常に多い。

南洋の寂寞たる天地に馴れたる我々は、實に一種の赤毛布で人通り繁き街を見て、唯呆氣に取られてゐるのみだ。兩側の家屋は石造煉瓦で、見るから暑苦しく感じられる。  
 郵便局の前は路が三叉を作して、雑沓を極めてゐる。往來に面せる長屋は間口を六尺位に仕切て、呉服店から荒物店までが、所狭きまでに商品を列べてゐる。  
 加之も往來の兩側には露店が列んで、琉球搦に琉球簪といふ島の美人が、廣袖の華美な衣服を左袵に着て、泡盛などを賣つてゐる。  
 此の雜然たる狭き街を、人車や荷車が間なしに通るのであるから、不知案内の我々は大いに間誤つかざるを得ない。

勝伯も僕も頗る弱つて、通掛りの一青年を呼止め「此の邊に宿屋が有りますか」と先づ問ふて試たが、悲しや一向に通せぬ。沖繩縣へ來ても日本の語が通せぬとは、何だか心細いやうにも思はれた。其中に幸ひに巡查に行き逢つて、初て宿屋の所在を知り、此處に腰を落着けたのは、其日も已に暮れんとする頃であつた。座敷へ通つて坐るか坐らぬ中に、指に入墨した琉球女が訛のあつて「反物買ひませんか」と三四人亂入して來た。煩さく附纏ふて容易に立去らぬには又弱つた。

那覇港上陸の第一日は、此の如くにして我々を喧囂の渦中に投じ、長閑で悠暢した仙郷から、亂雑で紛糾した俗界へ突然に投出されたやうな氣がした。

障子を明けて市街を瞰下せば、赤瓦の屋根は石壁に圍まれて、幾重にも窮屈さうに折繞らしてある。見た丈でも頗る暑苦しい。一浴の後、久振で浴衣を引掛けて夕餐の膳に向ふと、琉球新報記者渡口政成君が來訪せられた。

同君の話に據れば、現今用ひられてゐる琉球の語は、我が足利時代の語から訛つて來たものだと言ふ。

其例を擧れば、お出なさい——めんさう（免候らへ）難有う——にへえへふる（二拜侍る）下さい——ぐはいしやく（御拜借）の類である。

又た當地は一體に風強く、殊に夏期には暴風が吹き起るので、日本風の家屋では忽ち吹飛されて了ふ虞がある。それ故に屋根一

坪の重量八十貫といふ素敵に重い家屋を建てた。其上に支那風の建築が輸入されたので、其結果自然と城壁然たる家屋が出来たのだが、外觀ほどには暑くも無いさうだ。尙其他にも種々の面白い話を聞いて、右の渡口君の案内で、明治座といふ劇場へ琉球の劇を見物に行く。

那覇には劇場が二ヶ所ある。一は成田座と云つて普通の内地の劇、一は明治座と云ふ琉球劇で、渡嘉敷守禮一座に依つて三百六十五日打通してゐる。

この明治座は昨年の夏五千圓を費やして新築したもので、優に二千人の観客を容るゝに足ると云ふ。僕の見たのは『春踊』と題する優美な手踊と、琉球史劇『普天間権現御利益』の中で夫婦再

會の場と云ふのであつたが、背景の如きは内地の田舎芝居では見られぬ程に完備してゐる。

座長の守禮と云ふのに會つたが、彼は年廿八、年に一二回は東京大阪の各劇場を視察し、近頃は大分ハイカラになつて『不如歸』『金色夜叉』等をも琉球語に譯して場の上せるさうだ。

由來琉球は土地の割合に人口が多く、全島五十五萬人を算する位で、生存競争が頗る烈しく、又之と同時に慰安の途を求むること急であるが、彼等は劇場以外に何等娛樂機關を有して居らぬ。茲に於てか劇場は一年中打通しても、毎日大入を占てゐる理窟だ琉球劇に就ては幾多の材料と脚本とを手にしたが、其説明は長くなるから略す。

劇場を出て、更に足を遊廓に入れて見る。二百軒の遊女屋は例の石垣を高くし、門扉を堅く鎖して、洋燈の光さへも洩れない。其の嚴重なる門内には、美妓三千を貯へてゐるのだと云ふ。而して彼等は社會の上流に位する者で、王室に大禮ある節には必らず彼等を招かれたものだとも聞く。普通の家でも婚姻の節には新郎新婦相携へて青樓に遊び、尠くも一週間は滞在するとは一種の奇習と云はねばならぬ。其理由に曰く、女は嫉妬を慎むべきものであるから、先づ結婚の當初に其角を折つて置くのだと。又葬式の折りにも、遊女の一族が参列するなどは敢て珍しい事では無い。斯くの如く、遊女は冠婚葬祭に缺くべからざる者となつてゐるから見識も却々高く、一見参の者には登樓を許さぬ。漸く許可

を得て門内に入つても、遊女の御意に召さなければ客にはなれぬと云ふ次第である。彼等は又遊藝に富み、蛇皮線、太鼓、琴を合奏して古雅な唄を謳ふ。其一節を紹介すれば

## 四季の唄

さても芽出度や新玉る、春は心も若返り、四方の山邊の花盛り  
 長閑かなる夜の、春に告げ来る、谷のうぐひす(下畧)  
 束ね髪に銀の耳搔のやうな簪を挿して、大柄の琉球服を着け  
 調子緩かに古雅な唄を謳ふ琉球の遊女、又一種優美の俤がある。

## (廿九) 首里城見物

翌る十日の新聞紙上に雲鷹丸入港の記事が掲げられたので、幾

多知名の官民から鄭重なる訪問を受けた。河村内務部長は特に我の爲に屬官を派して、東道の主人たらしめた。午餐を早く済した僕等一行は、人車を連ねて首里城見物にゆく。

人馬の往來繁き道路は、石灰質で滑かであるから車輪の走り心地が好い。其の忙しい巷の辻に茫然佇立んで居る島人の異様の風俗は、矢張り南海の孤島たる趣きがあつて、其悠長なる點は支那式の範圍を脱せぬ。

町の南端孔子の廟に車を停めて門に入る。廟は我が寛文十二年の創建に係るもので、正面に孔子、左に顔回と子思、右に曾子と孟子の像を安置し、總て支那風に出来て居る。昔は此廟で四書の講義があつたものだといふ。

再び車上の客となつて、町盡頭の崇元寺に詣つ。尙侯爵家累代の靈位を祀れる所、榕樹鬱蒼たる森は、如何にも其れに相應しく見える。墓守に頼んで寶物たる鎮西八郎爲朝の矢といふを一見したが、篋は三尺位のもので、鏃の鏃は腐蝕して已にポロポロになつてゐる。臂の筋を抜けたる後の爲朝の持矢としても、些と華奢に出来てゐるやうに思れるが、滅多な事は云はれぬ。

寺を辭じて出ると、是から先の見渡す山や丘の頂上には一木も見ず、耕されたる畑は何處までも續く。琉球人は此の如く尺寸の地も剩さず耕し植ゑてゐるが、住民は尙且つ衣食の缺乏を訴へてゐるのだ。彼等の生活費は一日僅に一錢乃至四錢であるが、其れすら生存競争の結果、今では其の最下位に墮ちてゐるとは、氣の

毒の感に堪へない。

田畑の續く所に白堊の墳墓が累々として連る。墓は何れも草緑なる小丘を負ふて、壯麗なる小門を設け、満目蕭條として貧しげなる間に、獨り富めるが如き觀を呈してゐる。島人は墳墓を唯一の財産と恃み、時には典物として金錢の貸借も行はれると聞く、屍を土葬して五年の後、其骨を拾ひ壺に收めて墓所に安置する、其の慣習も全く南清の民と異らない。

車は何時か勾配急なる坂に蒐つた。坂は長さ十町餘、汚穢しい島人の一團は我々を目掛けて走つて來た。是は彼の立ん坊で、車の後押に僅少な賃錢を貰ふこと我内地と差異はない。

坂を登り盡して願れば、那覇の市街は眼下に展ける。烟突の聳

えて居るのは監獄署と聞く。工業は餘り發達して居らぬと見えて監獄署の他には烟突も見えない。

坂の上には觀音堂がある、別に本尊が祀つてある譯でもなく、唯だ遙拜所となつてゐるだけで、島人は泡盛と米粒とをホンの眞似事に供へ、柵の内に小さく茂つてゐる杜に對して、掌を合せて拜むのである、參詣人は却々多いと云ふ。

巡查駐在所の角から曲ると直に首里區となる。人口二萬五千、何となく古き都の匂ひがあつて、物の色が總て沈んでゐる。其處に詩趣は見出されるかも知れぬが、生氣は見出されぬ。

道幅は廣いが、兩側の人家には例の石垣を高く繞らして、滿城宛ら眠れるが如くにも見える。此處には師範學校中學校など有

えて居るのは監獄署と聞く。工業は餘り發達して居らぬと見えて監獄署の他には烟突も見えない。

坂の上には觀音堂がある、別に本尊が祀つてある譯でもなく、唯だ遙拜所となつてゐるだけで、島人は泡盛と米粒とをホンの眞似事に供へ、柵の内に小さく茂つてゐる杜に對して、掌を合せて拜むのである、參詣人は却々多いと云ふ。

巡查駐在所の角から曲ると直に首里區となる。人口二萬五千、何となく古き都の匂ひがあつて、物の色が總て沈んでゐる。其處に詩趣は見出されるかも知れぬが、生氣は見出されぬ。

道幅は廣いが、兩側の人家には例の石垣を高く繞らして、滿城宛ら眠れるが如くにも見える。此處には師範學校中學校など有

つて、制服の學生が三三五々往來するのを見たが、思ひ做しが其眉宇には一點の陰がある。舊王城の門に達して車を降りる。那覇から此處まで一里十一丁餘で、車賃僅に十錢とは廉いものだ。

### (三十) 故王宮

王城は尚家の故宮で、春雨秋霜こゝに幾百年、今は苔の色、苔の香に昔を偲ぶのみであるが、尙自から當年の俵を存じてゐる。石段を登つて、兩側に唐獅子のある門を潜ると、漏刻臺と稱するものがある。是れ當時の天文臺で、星辰の觀測をなす他に、水時計が据ゑてあつて時刻を計つたのだと云ふ。

城内には工業徒弟學校や女子工藝學校が有つて、其大部分を占

領してゐるが、右方の庭園は荒れたりとは云へ、山亭水榭の趣が幾分か跡を止め、現世の歡樂に耽つて夢幻のやうな其日々々を送つてゐた當年が想はれる。秦の阿房宮に模して造つたと傳へらるる此の城は、實に五歩に一樓、十歩に一閣の壯麗を極めたものださうだが、今は唯だ草木蕭條と云ふの他は無。

城門城壁には、明清兩朝の冊封使が筆に成れる詩が澤山見える。暫時低徊の後、歩を移して城門を出で龍潭池に至る。淀みたる水は緑を湛えて物凄く、龍潭の名空しからずと首肯される。池に面して尙侯爵の邸がある。

更に市場を觀て、何處も變らぬ醉漢を見て、再び車上の客となり、其日の午後六時頃那覇に歸ると、直に官民大合同の歡迎會に

臨んだ。會は觀水亭といふ茶亭に開かれたが、當日は恰も我が陸軍記念日に相當するので、那覇全市の提灯行列が催され、火影燦たる長蛇の列が、明治橋上を渡るの光景は頗る壯觀を呈した。觀水亭の宴散じて我々は宿へ歸るや否や、表には俄に叫喚の聲が起つた。夜は更けて已に午前一時。

何事が起つたかと、直ちに戸外へ飛び出して見ると、炎々たる猛火は月なき空に映じて、火粉がバラ／＼舞つて来る。祝融の神暴びて郵便局を焼き拂ひ、更に他の民家を灰にすべく威嚇しつゝあるのだ。琉球といふ國には、火事なるものが絶えて無かつたので、島民の周章狼狽に言語の外で、見る／＼民家廿餘戸を焼落して了つた。焼趾の光景又慘たるもので、類焼者は殆ど手を束ね

て爲す所を知らぬ位、但し縣廳では時を移さず彼等を收容救助したので、類焼者も先づ安堵したらしい。

此の不時の出來事の爲に翌十一日の午前は出でず、午後横内縣屬の案内で、當國の忠臣毛國鼎護佐丸の遺址を訪ふべく、勝伯と僕は宿を出た。

其途中で中頭郡西原間切我謝村に立寄り、農商務省の糖業改良事務局を一目した。四方から集つて来るトロに満載された甘蔗は大なる齒車に壓搾されて、其の液汁は更に幾たびか煮詰められ、遂に分蜜糖となるまでの諸機關運轉を、山中技師の説明に依つて逐一會得する事を得たが、聞く所に據ると、琉球製糖業の創始は三百餘年前即ち我が元和九年で、殊に明治以來事業は駁々として



進歩し、明治廿一年には三十二萬九千四百六十七圓の收入であつたのが二十年後の四十年には百九十六萬六千二百九圓となつた。尙其の改良進歩の方法に就ては、當局でも大に意を用ひてゐると聞くから、其前途頗る有望と云はねばならぬ。

こゝを辭して中城に向ひ、彼の護佐丸の靈を祀れる古城を弔ふた。護佐丸と云つては知らぬ人があるかも知れぬが毛州鼎と云へば馬琴の『弓張月』で何人も御存知の事、今更に中山傳信録の受賣をするにも及ぶまい。

護佐丸を祀れる古城の址は、大城の山上に在つて、峻しき坂を前後に控え、先は要害堅固と云つても可い。鬱蒼たる森林の中に峨々たる城壁が隱見する所頗る詩的の趣がある。俯瞰すれば

渺々たる海遠く、中城灣に珊瑚礁の點々たるが青海の中に獨り底紅く見える。護佐丸が此の孤城を守つて奮闘し、後に自害したと云ふ歴史ある部屋は今村役場となつてゐる。其の狐兒鶴龜が父の仇を報いたのは有名な話であるが、護佐丸忠戦の事蹟には我が楠公の事蹟が餘程混じてゐるらしい。

元來琉球の昔物語話の中には、内地から輸入したらしいものが尠くない。現に『鐘魔』は我が『道成寺』に擬し『女物狂』は『梅若』と『高野物狂』を焼直し、『布刈子』は『羽衣』を其まゝである。城内を一巡して更に山腹にある護佐丸の墓を拜し、讀谷山村の鐘乳洞波平野社にも詣つて歸宿したのは夜の九時であつた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

翌十二日の午後四時、本船は愈々那覇港を出發した。當日は早朝から北東の風が吹捲つて、午頃からは大風雨となつた。此の低氣壓が懸て鹿島灘へ向つて、彼の漁船幾艘覆没の大慘事を演じたと後に知つた。日が暮れても風は益々吹き募るので、本船は豫定の航路を進む事が能ず、十三日は沖繩の島山を眺めながら徒爾に漂ふの他無かつたが、十四日には風が西南に變る。船は追風に帆を揚げて、十哩の快速力で琉球群島に沿うて進み、鬼界ヶ島、徳之島、沖永良部島、與論島、屋玖島を左舷に見て鹿兒島沖に出て、幾度か風雨と闘ひつゝ、十八日には土佐の蹉佐岬を望み、廿一日早朝には志摩の鳥羽港に入つた。一行はこゝに上陸して伊勢の大廟を拜し、廿三日鳥羽を出帆して廿五日館山港に入り、更に

品川に歸着したのは廿八日、昨年十一月卅日出帆以來、百廿日間の船程實に九千六百廿八哩である。久瀧で東京の人となつて電車に乗ると、何の人も皆顔色蒼ざめて見える、南洋の黒い人間に見馴れた眼には無理もない。斯く申す僕は到る處で色が黒くなつたのに驚かれた。

## (二) 北太平洋 無人島の探検

▽七十六噸の小帆船Ⅱ航程二萬五千餘哩▽

四十二年十一月十一日、隅田川口を出帆した小笠原島遠洋漁業會社所屬スクーナ型帆船小笠原島丸(七十六噸)は、遠く西半球の布哇群島、バアール、エンド、ハームス島、リサンスキ島、レイサン島、フレンチ島を巡航して、南の方中央ホリネミヤ群島のキングマン礁、バルミラ島附近に鱈漁を試みて、漸くに翌年八月二十九日小笠原父島に歸り、漁獲物の整理をなして、九月二十日東京灣に入った。其の航程實に二萬五千餘哩で、航海日數は前後十

一ヶ月に亘つて居る。

憚る小帆船にしてよく三百有餘日、渺々たる太平洋上に、荒き風波と戦ふて、何等事無きを得たる事は、直に以て海洋旅行の安全を説くに足るであらう。同船の漁撈長長友寛氏の談話を聞く。

(四十三年九月二十二日記之)

## 長途の航海

に上る準備として、十一月十一日隅田川を出帆した小笠原島丸は、十六日の夕刻、小笠原父島二見港に投錨した。由來此の航海は、北風吹き續く冬期にあつては、頗る容易なものであつて、一度帆を捲き上げれば、敢へて一指を勞せず、唯羅針盤を睨んで

舵を握つてさへ居れば、船は黙つて廣漠たる大海の一粟たる、父島へ間違なく着くのである。

本船は此處で、今後一箇年間二十名の乗組員が海上生活をするに足る、設備萬端を整へた。

航海中は一塊の芋、一粒の米と雖も求めて得られぬものだから其の積込も念には念を入れて、遺算なからん事を期するので、却却に面倒だ。殊に飲用水は、水上に生活し乍ら、常に不足を來たし勝ちなもので、貴重品中の隨一に數へられるのだが、船積少ない本船には、十噸以上は蓄へられないのだ。十噸の水は以て船員二十九名を、四ヶ月間支へるに不足である。後日之が爲めに、幾度か困難に遭遇したのである。漁具は鱈延繩の外、何物をも積ま

ない。之れは此の航海が、我が國に於ける最初の鱈専門の漁であるからだ。悉くて出帆の準備全く整ふや、十二月五日（前記水産講習所の雲鷹丸が館山港を出帆したのと同じ）朝未だ早き七時、折柄の北風に帆を捲いて、故國の岸を離れた。出帆は非常に意勢のよいもので、船員各自の眉宇には、既に南海の蒼波を凌ぐの概がある。

二見港を出てからは、幸ひにも冬には稀な好天気打ち續いて、帆を孕ました本船は、心地よく傾斜して萬疊の波を蹴破り、只管西へくと走つた。

海洋の魔島たるガンヂス島を北に通つた十三日の朝、晴雨計は猛烈に下つて、暴風雨の襲來を告げた。總員甲板に出で、ハツヂ

を密閉し帆を絞り、而して其の来るを待つのである。  
 一點の黒雲地平線に顯はるゝと見るや、翼を擴げて一瞬、満天を掩ひ、天地爲めに暗澹となる。風は雨を交へて帆繩に碎け物凄く唸る、併し風位は針路に恰好なので、僅かに縮帆したのみで、山なす巨浪を劈いて進むのだ。

## 壯絶快絶!

七十噸の小帆船が、怒濤狂瀾と白沫を飛ばして、戦ふ雄々しき此の姿は、陸の人の想像出来ぬ所だ。

十八日に至つて、吹いて吹いて吹き續いた烈風は凧いだ。暴風雨後の海上は、一種寂寞の感が深い。空は洗ふた如く晴れ渡つて

海水の色深碧、餘波未だ収まらず、船は徒らに動搖して巢を失ふた海鳥の、高く舞ふものがあるなど、何となく孤舟の客たるを覺ゆるのである。

廿四日には百八十度線を通過して、一行は茲に西半球の人となつた。此の時既に、布哇群島の最西端、オーシン島附近に来て居る譯であるが、二三日來の曇天に、天測は出來ず、今は船の位置すらも解らなくなつた。

オーシン島は西經百七十八度三十分、北緯二十八度二十六分、横濱を距る南東二千四百哩の海上に在る無人島で、蜿々たる珊瑚礁は、二個の島を抱いて全周約十八哩ある。其の大なる島は周圍三哩半で、高さ二十呎、一面に倭いたばこの木が繁茂して、四季

常に鬱蒼として居る故に、緑島の稱がある。モウ一つは周圍僅かに一哩で、高さ十呎を出ない、砂島であるから、天氣晴朗の日と雖も、餘程近寄らぬと、島の存在を認め得ないのである。然るに雲低く垂れた曇天は、天測さへ出來ず、船は唯風に任せて西へと進むのである。

西半球の二十四日正午、太陽は雲間にチラリと見えたので、直に六分儀を取り出し實測した。其の結果は意外にも、既にオーシオン島を過ぎて、ミッドウエー島との中間に來て居たのである。今更引返す程價值ある島でないから、第二の豫定地たるパール、エンド、ハームス島に針路を向けた。翌廿五日午後一時其の西岸に達した。

本島は西經百七十五度五十七分、北緯二十七度四十八分に在つて、純乎たる珊瑚島である。周圍四十哩の礁湖を包む礁脈は、七箇所海上に點々露出して島を形成して居る。數千百尋の海底から細爾たる珊瑚蟲の絶えざる努力と、偉大なる時の力とで、一分一厘づつ作り上げた此島は、彼等の特徴として北東から東に當つて最も高く、堅固に礁脈は海上に突出して居る。東北貿易風に依つて絶えず起る波濤は、之に遮られて礁湖の水は、永久に春の如く平靜である。之れ許りではない。珊瑚蟲が犇々と築き上げた環礁の少なくとも一箇所を吾人の爲めに切り開いて、何等の危険なく波平かな礁湖に導いてくれるのである。學者は此種の島を稱し、

## 島嶼の墓碑

と云つて居る。其の説に、珊瑚蟲は百尺より深い海底に棲息は出来ない。最初島の岸に生成して、其の裾を圍むものが、陸地の沈降と共に、底部の珊瑚蟲は次第に死去して、蟲は上方に向ひ繁殖生育して、遂に環礁となるのだと云ふ事である。

話は横道にのみ走るが、此のパール、エンド、ハームス島の命名に就ては一つ悲惨な物語があるのだ。西暦千八百二十三年四月二十六日の事、米國捕鯨船パール號とハームス號とが、同夜同時に此の島の暗礁に乗り上げて難破した、乗組員は互に協力して、粉碎された船材を集めて、不完全な小船を造り、辛くもホ

ノル、港に歸還したのである。近く又明治三十三年、報効義會の龍睡丸(七十噸)は右同様此の島で遭難して、船員は七ヶ月の無人島生活に、僅に生命をのみ繼がないで居つた。折よくも日本帆船的矢丸に救はれた。其又的矢丸は其後獨逸人フエザア氏の所有となつて、名もパウラと改めて、南洋貿易に従事して居つたが、四十年の夏、マリアナ群島サイパン島の珊瑚礁に難破して、今は見るも憐れなる船體が、同島ガラパン町の岸に引上げられて居る。之を因縁すくともいふのであらうか(南洋奇談海の女王參照)

由來此の邊の島は、凡て難破船に依つて其の存在が認められたといふてよい位にて憊る物語に富んで居るのである。

本船が其の西岸に達した時、帆を絞つて島の南岸を東に徐行し

ながら、二艘の端艇を下ろして最初の鱈漁を試みた。二艘の端艇には漁夫三名宛を乗組ませて、鱈漁に出したのは其日の午後三時頃であつた。珊瑚蟲の多い此の邊の海水は、實に透明な物で二十尋以上の海底があり／＼と見える。泳ぐ魚は桔梗色した海水に紛れて、明瞭分らないが、黑影は點々と海底に寫る。其の魚影が珊瑚の礁角を縫ひながら、次から次へと遷り行くのだ。魚は餘り尠なくなささうだが、慙うも澄んだ海で徒らに釣を垂れるのは、當の敵に覺られる怖れがあるから、夜を待たねばならぬ。其の間鱈漁に恰好な場所を捜すべく、舵に任せて端艇は島の附近を漕いで歩く。十二月の末といつても地平線には、夏霞、雲の峰、シヤツ一枚でも汗ばむのである。

斯くて漸く午後六時に至り無人島の日は暮れ初めた。夕映の色全く消えて、天地蒼然となるや既に吾々の世界である。三百二十尋の延繩に十本の釣を垂らし之に數個の浮標を結び付けて流すのだ。浮標には赤い旗を立て、繩の兩端を盪に結ぶ、盪の中には燈を點して置く、其の燈は釣繩の所在を知る爲めで、旗の動き具合で鱈のかゝつたか否かを見分けるのである。端艇は、前に後に浮標の周圍を漕いで、見張つて居るのだ。夜に入つて、風は全く死し。小波も興らないとは云へ、有紫に太平洋の真中だ。大水牛の脊を擡げるやうな、大きなウネリは絶えず小艇を揺がす。去る程に、甲艇の浮標は一つ海中に没して、直に引き上げて見ると手應はある。元來鱈は癡惡で、貪欲な性質であるが、鱈釣に



かゝつてはカラ意氣地がないもので、釣手に従つて浮いて來るのだ。殊に二人は、ホツクを構へて待つ、其の頭が海面に現るゝ咄嗟、釣手は繩を擽がけに背負ふと、既に其時二個のホツクは、鯨の口を兩方に引張つて居る。釣手は悠然と短刀を抜いて小腦を目標懸けて一刀浴せる。鮮血迸しりて、彼は鯨一つ動かさなくなる。たとひ四十貫五十貫の大鯨でも、小腦を傷けられると、今迄暴れに暴れた鯨でも、殆ど死したるが如くなるものだ。慙くして十二時頃まで、漁を續けたが二艘を合せて僅かに十五尾の獲物で、大不結果に終つた。

四十二年の元日

は此の無人島で、心寂しくも迎へたが、前後一週間の漁に獲る所、八十尾とは又豫想外の失敗と云はねばならぬ。併し之は時期の早かつたため土地其のものが悪いのではない。春先き三四月頃なれば、一夜四艘の端艇で、八十尾位はお茶の子だと思はれる斯る所に長居は無用、一月二日南下の途に上つた。併し中央ポリネミヤ群島では、全く飲用水は得られないから、其の準備として、レイサイ島に針路を向けた。パール、エンド、ハームス島一週間の海上は、甚だ平穩であつて、連日風力微弱風位區々として一定しなかつた。時に強く、時に弱く、或る時は全く無風で、恰も斷末魔の苦しき奄々たる氣息のやうなものであつたが、果して次に來る異變の前兆であつた。

北及び北西の風は強く吹き續いて、航程三日、一月五日にレイサン島に着いた。其の時などは、島の全周は巨浪の爲めに、白沫粉碎されて、殆ど近よる事が出来なかつた。さるを敢て危険を冒して、錨地に碇泊して見たが、右舷の錨は破損されて止むなくも大海に逃げ出さなければならなくなつた。實に航海の危険は、大海に在りては絶無である。故に大暴風の來襲した時などは港に避難するよりは、反て沖に逃げた方が寧ろ安全と云ふ可きで、小笠原島丸は三日間遠く島を離れて漂流した。

八日風静まり、波平かなるを待つて、安全に西岸錨地に碇泊したのである。

此のレイサン島は、ミッドウエ島と共に、布哇附近の群島に於

ける唯一の飲用水補給所である。其れだけ遠洋漁船に取つては、重大な島であるから、特に詳細に説明する事にする。本島は、北緯二十五度四十五分、西經百七十一度四十七分に在つて、珊瑚礁盤の上に、砂礫を堆積した全周五哩の低島である。中央に沼池ありて、島一面は蒼薄の如き草に掩はれてゐる。地形は南北を長邊に、東西を短邊として、不規則な長方形をなして居る。故に東北西北、西南、西北は岬角があつて、各々海中に突出して居る。東北岬は最も長くして約半哩にも達して居るが、常に白浪に掩はれて居るので、容易に尖端が認識される。殊に他の珊瑚島と異ひ、礁脈は二十尋の深さを保つて圍繞して居るから、船舶には危険が尠ないのである。

而して錨地は、北部を除くの外は、何れの方面にも見出し得るが東北、正東及東風の風に對しては、西岸を採るべく、北或は西南の風には、東岸を擇ぶがよい。飲用水の目的で來るものであれば、西岸が最も便利である。井戸及び天水槽は凡て此の方面に備はつて居るのである。若し東岸より飲用水を得んと思はば中央の沼池を迂回せねばならぬ、故に直徑一哩の道も優に二哩に等しい。加之も道路凹凸甚だしいので、非常な困難を忍ばねばならぬ。元來此の島は、明治四十年頃迄米人經營の下に、専ら鳥糞採取の目的に使用されて居つたもので、當年の建築物や、澤山の什器其の儘に放棄されてあるので、吾々に便利を興へる事は非常である。島の西岸に

### 其の昔燈臺

であつたらうと思はるゝ建築物があつて、棧橋、家屋、椰子樹が二本あるので、容易に投錨に適當なる所を知る事が出来る。殊に、此の燈臺は高さ六十呎もあるので、天氣晴朗の日は、普通帆船の甲板から十哩以上も認める事が出来るのである。天水槽は、其の附近に一個と、棧橋附近の倉庫に一個とある。井戸は棧橋から沼地に行く道の中央にある。約二十呎の深さで、板で圍み、ポンプを用ひて汲み取るやうに出來て居る。井水は殆ど鹹味を帯びないが、時には一種の臭氣があつて餘り良好ではない。故に天水を先きにして井水を後にする方が補汲の順序であら

と思はるゝ。

島の最高頂は、東北に在つて、海拔約五十呎ある。潮流は退潮に南へ、漲潮は北に通じて急激でない。其外に、流れはないやうであるが、錨地以外の海洋では、本島を去る事五哩の附近で、期節に依つて北又は南に流るゝものがあるらしい。或る者は一月頃は北に、四月頃は南だと云ふが、未だ此等は詳かではない。以上は吾々が親しく實見した事共である。

此處で本船は二日間、飲用水の補汲に従事して、十一日愈々南下の途についた、其の南下の理由はリイサン島一週間の鱈漁に、期節の早い事を知つた吾々は、赤道近い中央ポリネヤ群島から其の交尾期を漸次北に追ふ事に決定した。

一月十一日帆を捲いて、北緯十六度四十四分、西經百六十九度三十二分のジョンストン島に針路を向けた。同島はリイサン島から南々東六百哩の距離に在るので、假令海流強く西に流るゝものがあつても、四晝夜を費せば優に達し得らるゝ筈である。が出帆した次の日の朝から、東北貿易風は俄然正東に變りて、風力頗る強烈となり、本船は正南に針路を取るの餘儀なきに至つた。北緯十六七度附近に至ると、潮流猛烈であるに搗て、加へて連日雨天なので、船の位置を測る事が出来ない、徒らに知らぬ海に漂流して居るのである。殊に雨中の航海は、陰鬱を極めて、いやが上にも眼界は狭められ、不快云ふ可らざるものがあるのだ。恚る航海を六日續けて、十七日の朝は、織塵なき迄に晴れ渡つ

たので、太陽の高度を測つた所が、ジョンストン島の西南約百哩の海上を航海して居ると知れた。此の時初めて風は貿易風に復して、北東となつたが、波は高く絶えず甲板を洗ひ、進行却々に自由でない。止むなく目的地を、西經百六十二度五十二分、北緯六度二十九分のキングマン礁に変更して、巨浪を右に左に轉じながら、只管航海を續行した。

北緯十度線を過ぐると、吹く風さへも穏かとなつて、海水の色益々美しくなる、静かなる船の動搖に連れて、私語く波の音を聞きながら、帆影に身を横たへて、碧空を望むと、白雲一片天地悠悠たる趣きがあるのだ、若し夫れ、夜に入れば満天の星、銀珠と凝つて、

## 南天十字星

は地平線上に、波に洗はれて見えるであらう。既に北斗星は北に低く、オライオン星座の三ツ星（赤道線上の眞上に在る星）は頭上に高く、シリウス、カノパス等の一等星は木曜星（太白）と共に、明、月に似て、細き銀波を熱帯の海に曳くのである。恚る夜に、携へた一壇のウキスキーを抜いて、聲なき風に、酔顔を吹かせるならば、實に羽化して、天上した思ひがあるであらう。爽快な航海を十二日間續けて、二十九日、船はキングマン礁四哩附近に来て居る譯となつた。大海の航海は、唯一定の針路に、舵を握つて居ればよいのであるが、島嶼近くに來ては、眠れるも

のが目醒めた如く、舳に、櫓に、見張番が立せ、雙眼鏡は左右を絶えず警戒するのである。ところが、島らしいものは、一向に認められないので、幾度か天測をして見たが、其結果は三四哩附近に来て居るを知らせるのみである。此時の船長の苦心は、夥しいもので、血眼となつて、前後左右を見て居る内に、白波の立騒ぐ一點を見出した。漸く海水の變色して居るのを見て、礁の在るを知つた。續いて海面上に、僅か露出して居る島を見出した。之が即ちキングマン礁で英國領土に屬し、英政府の治下にあるのだ。完全な珊瑚礁であつて、東方の一部、僅かに海面に露出して居るの外、南、北、西の三面は、干潮と雖も海面下に在つて、時々白波を立てるのに、僅に存在が認められる位なのだ。殊に西部は三

尋の深き海中に在るのだから、漸く海水の變色を以て知るのみである。

此の珊瑚の暗礁とも稱す可きキングマン礁は、右説明した如く、大部分が海面下に隠れて居る、周圍約二十哩の環礁であるから、附近を航行する船は、十分注意を拂はぬと危険である。現に吾々は、天氣晴朗の日にあつても尙且、三哩以内で漸くに認め得た位だから、夜間に近接する事は断じて避けねばならぬのである併し寧ろ風浪荒き時は、反つて安全なのだ。波の岩に碎けて、高く天に沖する飛沫は、遠くからよく望み得らるゝものであるから。扱本船は、正午礁湖内に徐々と這入つた、其時風は急に凩いで了つた。風死して船は自由を失ふた、時も時とて、干潮の眞最中

で、流潮は頗る烈しい。船は潮のまに流さるゝのみだ。加之も礁湖内は、到る處深くして、錨を投ずる場所がない。周囲は凡て暗礁の集合だから堪まらない。危険は刻々迫つて来るが詮方ない、今は運を天に任すより外、策はないのだ、遂に西部の暗礁間近に押し流されて、絶體絶命となつた。

此時幸ひにも、水深を計つて見た所が七尋といふので、早速左舷の錨を投じた爲めに、辛くも一同無事なるを得た。九死に一生を得た吾々は、天佑の一語の下に、勇氣百倍して、午後六時、三艘の端艇を下ろして、三十日の午前三時迄、鱈漁を試みた。獲物は六十尾。かなりの成功である。

此處で三日間釣を垂れて、好成绩を得、二月二日、早朝南西六

十哩のバルミラ島（北緯五度五十二分、西經百六十二度五分）に出發した。

順風に帆を孕ました本船は、同日の午後五時、地平線に青一髪のパルミラ島を見た。近よるに従つて、椰子樹の繁茂して在るのが認められる。荒涼たる矮草の島、磊々たる岩礁をのみ見た吾々が、此の蒼々とした島に接した時は、一種言ふ可らざる感慨に打たれた。本島も珊瑚礁であつて

## 大小五十の島嶼

は星羅棋布して、四個の礁湖を圍むで居る、其有様は、遠く之を望むと、恰も吾が松島か瀬戸内海のやうで、近き島は緑濃かに、

遠きは紫、更に遙なるは淡青色をなして、實に快よい眺めである。午後六時半頃、本船は島の一部に錨を投じて、静かなる夢を結んだ。次の朝甲板に立つて見ると、十六日月は椰子樹に隠れ、森漫たる珊瑚は曉天に没して居る。端艇を漕ぎ寄せて、島に上陸して見ると、無数の白鳥は人珍らしげに、吾々の頭上に群をなして翩翩と飛ぶ。椰子樹の森は亭々として、葉末を渡る風の音も、昨年來初めて耳にする譯だ。

日漸く高くなると、灼々たる熱帯の太陽は、白砂に反射して閃々燦々、誠に目眩に堪へない。炎暑に疲れた時には、天來の清泉たる椰子實に渴を醫すのである。椰子は其の厚き皮を剝ぐと中に拱犬の堅き實がある。頭部に三個の穴があつて、其の一つは容易に

穿つ事が出来る。中にはコップ二杯程の透明な液汁がある、味頗る淡泊だ。飲み丁つて其實を割るならば、白きクリームのやうな粘膜がある。非常に脂肪分に富んだものであつて、餓を満たすに足りる。若し夫れ、椰子の花の尖端を剪つて置くならば、數日にして白酒の如き椰子酒は滴るであらう、其の酒を一週間蓄へて置くと、立派な酢になるのだ、椰子一個の實は、如斯變化するものであるから、凡ての生物は彼の下に集るのである。

本島の生物は、椰子樹蟹、學名マツカレ蟹と蠅の外、白鳥のみで、誠に寂寥たる無人島である。併し椰子樹の有る以上は、人間の棲息し得る島と云はねばならぬ。現にマーシャル群島、カロリン群島の土人は、僅か方一哩位の珊瑚島に、椰子の實のみで生活



して居るのである。(前篇参照)  
 一巡島の地勢を探検した吾々は、鯨の漁場を捜すために、端艇を礁湖深く漕ぎ入れたが、潮流の急激には驚かされた。東南に流れて居るものが、忽ちにして北西に轉じ、南東に通じて居つた潮が、北東に奔流すると云ふ有様で、夜間は勿論、晝間と雖も、安心して延繩が出来ない、止むなく二月九日、拂曉再びキングマシ礁に引き返した。

二月十一日には遠く紀元節を、南洋の一礁上に祝つた。二十日間の寂しい生活に、専ら鱈漁に従事して好結果を得た。尙南下するの計畫はあつたが、既に無風帯は、赤道附近迄進んで来て居たので、補助機関のない帆船の航海は、不可能に屬するので、二月

廿八日、北航フレンチ島に向けて出帆した。モウ此の頃は、東北貿易風も平調に復して、絶えず一定の方向から、一定の風が吹くので、航程六百餘哩も爽快なる日を重ねて、三月十二日無事に着いた。

同島も矢張り珊瑚環礁で、十個の砂丘から成立して居る。岸には、美事な亞米利加松の角材が、算を亂して打ち上げられて居る之れは潮流の關係で、北米タコマ邊の製材會社の材木が、漂流して來たものであらう。左岸には、

### 一個の難破船

が波に洗はれて、滅茶苦茶に壊れて居る。見た所餘程古いもの

である、勿論乗組員の生死の程は分らないが、船體の具合から推して見ると、本島に漂流する前に、船員は死んだものらしい、悲惨なる物語を蔵する難破船の遺骸は、徒らに西風に曝され、波に打たれて、船材は殆ど朽ち、今は何等の用をなさない。憐む可き船の末路を葬つて、吾々は早速鱧の有無を探ねたが、キングマンに比して北に位する本島は、鱧の交尾期には未だ早いと見えて、左程多くを認める事は出来なかつた。

二週間の滞在に、ライサン島で積込んだ十噸の飲料水は不足を來し、鱧の好漁期を待つ間もなく、飲料水を求むべく、再びライサン島に赴かねばならぬ事となつたので、二十六日に出帆した。曩に南下の節、曇天打ち續いた爲め、遂に認め得なかつた、ジヨ

ンストーン島へは、道の序だから二十九日に寄つて見た。

所が此處では、丁度鱧の交尾中であつたので、直に漁を初めた所が、一夜に百尾の大漁があつたので、十四日迄碇泊なし、其の午後六時ライサン島に向けて錨を上げた。

十八日の夕方、約百日振り、ライサン島の西岸錨地に入つた。直に上陸して見ると、棧橋や倉庫には別状がないが、何となく野分のあとのやうに、多人數が暴れた形跡がある、如何にも不審で堪らないが、聞く人ともないから、直に飲料水を積込みに加つた。

後七月十八日、三度飲料水を汲みに來た時、以前は鳥糞會社の社長で、今は島の所有主なる米人マックス、シユレンマー氏が居

つて、此の不思議なる形跡に就き親しく物語つた。讀者は記憶せらるゝであらうが、本年二月八日、吾が同胞は此の島で、鳥毛を採集して居つたのを、米軍艦は密獵者として捕へ、ホノル、市へ押送したのである。

リーサン島を二十日に出發して、再びフレンチ島に赴く途中、二十九日の午後から、北緯三十度、西經百六十七度の海上で、風は全く風いで了つた。

風と波とに任せて、航海する帆船の事として、今更如何ともする方がない。唯徒らに風の來るを待つのみだ、四月は無風の裡に過ぎたが、五月に入つても一向に空模様は變らない、渺々たる海は油を流したやうに小波さへもなく、飛ぶ鳥の影も見えなければ、

泳ぐ魚の片鱗も認められない。世界は限りない青空と、渺漫たる水と、船の外に何物もないのだ。船員互の顔は見飽きて、話も既に材料は盡き、幼物語も幾度か繰返されたのである。風が永びくと

### 無聊の絶頂

で、船員の意氣を阻喪される事夥多しい、漸く五月三日に至つて、北風が吹き六日正午フレンチ島に安着した。

既に、其の頃の同島は、蟻や龜の交尾期であつたので、渺からぬ獲物を得た。六月十三日午前八時、思ひ出多い此の島を出て、東百淫のネツカ島に向つた。

十七日朝、該ネツカ島の三漚沖に来て望むと、島と云ふよりは寧ろ岩塊とも云ふ可で、諸岩突兀として懸崖數百呎、太平洋の怒濤が岩底に激して、端艇でも近よる事が出来ない有様だ。近海に於て、鱈漁を前後三十五時間程試みたが、獲る所は二十三尾で、何れも矮小、殆ど數ふるに足らぬ位なもの許りであつた。其れから、ジョンストン島に寄つて、イイサン島に飲料水を補汲し、七月二十四日、午後二時にいよく歸國の途についた。長い航海を終つて、さア直航歸國に向ふといふ時には、有繋の船乗りも急に元氣がついて、錨を捲く音頭迄が、素晴しく威勢がよいものだ。小笠原父島の二見港に入つたのは、八月二十九日、一行は二週間此所で休養して、九月十四日同港出帆、同月二十日

に、隅田川に無事歸つた。

昨年十一月十一日出帆以來、三百十二日間、朝夕海風に吹かれて居つた身が、久々で東京の土地を踏んで、電車に乗つて見ると誰れも彼れも蒼白い顔ばかり、アレでよく血が通つて居るなアと思はれた位である。

兎も角、我國に於ける最初の鱈専門の漁は、大した失敗なしに茲に終局を告げたのである。唯一つ残念なのは、航海中水夫に一名の病死者を出した事である。勿論、式の如く國旗に包んで、水葬して、頭髮だけは持ち歸つた。

次に數名の不治の病者を出した。此等は其の何れもが、大酒家か、さなくば以前一花柳病に罹つた者のみである。此の現象は大

に注意すべき一事だと思ふ、由來南洋航海は、生物を食ふ事が出来なない爲めに、健康の人も尙胃腸を害するのであるが、殊に南洋航海となると、炎暑烈しい故か、脳病患者を出す事が多い、中にも花柳病を煩ふた人は、假令數年前に全治したといつても、再發する虞があるから、今後南洋航海に従事する船は、須らく、船員の健康を診断する必要があらうと思ふ。注意の爲め一寸と附言して置く。(完)

(三) 南洋奇談

○海洋の魔島

二十世紀の文明も、未だ太平洋には洽ねからず。北太平洋の真中と、犬吠岬の沖に、有無甚だ曖昧なる幽霊島がある。正體を見届けたと稱する船長もあれば、其魔島はないと云ふ艦長もある。事の虚實は、未だ以て明かでない。唯徒らに、疑問の裡にあるのみである。

日本の水路誌には「北緯三十度四分、東經百五十四度十分」にガ

ンジス島あり。又北緯三十一度五分、東經百五十四度十四分に一  
 礁あり。是等の危険は、往時より屢々認めたりとの報告ありと雖  
 も、小笠原島人は、曾て數回、之が探検に従事したるも、遂に認  
 めたる事なしと云へり、海圖にはP、D(疑問の意)符を置くに雖  
 も、其の實、有無未定なるが如し、航海者は宜しく警戒すべし』  
 とある。

成程、海圖を擴げて見ると、其の經緯度に、點線を以て、二箇  
 の島が記入されてある。故に、太平洋を航海する船舶は、危きに  
 近寄る可らずで、海上の往還は廣漠たるだけに、遠く針路を避け  
 て走る。避けて通る船舶が、如何に頻繁に往來した所が、此の島  
 に就て何等の好消息を齎して來よう筈がない。

ガンジス島は、斯くの如くして、永久に、有無未定の句の裡に  
 葬られるのではあるまいか。

世間から、恚くも敬遠される、此の島の記録を訊ねて見ると、  
 頗る漠然たるもので、其の發見者すら、知る事が出來ないのだ。

西曆一千八百八十六年、倫敦で發行された、フイドレ氏水路誌  
 には、位置は少し異ふが、危険物ありと、簡單に説いてある。是  
 と同年に、米國水路部出版の、北太平洋報告追補には、其の存在  
 を否認して居る。近く我國では、玉置半右衛門氏が、鳥糞の多い  
 見込で、屢々探検を試みたが、遂に發見せられずじまつた。

處が、明治四十年八月、東京市小石川區諏訪町二十番地山田  
 三郎氏は、突然、東經百四十四度二分、北緯三十度に於て、新島

を發見せりと、小笠原島司阿利氏に報告をした。島司は東京府知事に、府知事は内務省に進達した。遂には、外務省から水路部迄を騒がした。其の報告書は次の如きものである。

- 一、該島は小笠原島を距る事、五百六十哩にして、全島周圍一哩二十五丁。
- 二、島内全面積六十四萬三千七百坪。
- 三、地積八分迄燐礦堆積し、其の厚さ平均六尺位にて、石灰は二十パーセント乃至二十五パーセントなり。
- 四、樹木はタコ樹一坪平均一本位なり、稀にカキ樹を見る、飲用水の自然に湧出するもの無し。
- 五、鳥類は馬鹿鳥(白黒共に)一見數百萬を算す。

- 六、該島は海圖に於ける、ガンジス島に相當すと思惟す。
- 七、探検の上、別紙圖(略す)面の如く、島内を三分して、假に小字を日向平、真島山、西向平と命名せり。
- 八、船付場所は西向平にして、之れを西港と假稱せり。是に由て之を見ると、位置は海圖に比して、約五十哩南々西になつて居るが、誠に小ならざる島で、青葉は繁りて、物産は多く如何にも住み良さうである。

併し、此の話は何時の間にか、有耶無耶に消えて、今日では杳として、其の後の消息を聞かないのだ。

越えて四十二年十二月、余が雲鷹丸に便乗して、南洋に向け航海した、其の途中、ガンジス島の附近を通つた時に、一羽の鷗に

似た小鳥が甲板に飛で来た、其の事は既に前篇に於て説いた通りであるが、洋中の小鳥！ 不思議極まる事で、或はガンジスなる島が、事實存在して居るのではないかと、附近を捜して見たのだが、遂に其の片影だに認め得なかつた。若し山田氏の報告の如く、樹木が繁茂して居るものとすれば、餘程遠くから望み得らるゝ筈である。又十二月頃の信天翁は、空中高く圈を巻いて群るものであるから、些細なコロンメータ位の差で、見出し得ぬ事はなからう。

恁くのこととしてガンジス島は、幽霊島として、未だ海圖には點線を印して、有無未定となつて居るのである。

次に犬吠岬の島に就て物語らう。

此の島が最初発見されて、記録に載つたのは、西暦一千八百六十四年即ち吾が慶應元年の事で、露國軍艦サイボル號が、偶然にも見出したのである。

其の艦長の報告には「北緯三十四度二十分、東經百四十三度十分（即ち犬吠岬沖北東約八十哩）の海上に一礁あり、海浪の岩礁に激して、白沫を飛ばす光景は、其の力極めて猛なるが如し。水面上より高き事、約二十呎ならん。然れども天氣密濛の爲め、須臾にして見失ふ」とある。

然るに同年、英吉利西測量船シルビア號は、斯る岩礁は無しと否定して居る。次で明治七年、英國軍艦ジストル號は「二回接航したれども、晴天に拘はらず、何物をも認めず」と通告した。其



處で一度海圖面から該島は削られ、世の航海者は安心して船を進めた。

然るに明治二十一年十月二十二日、加奈陀太平洋汽船會社のアビミニヤ號は、突然外務省の手を経て、吾が水路部に該礁發見の報告をなした。曰く北緯三十六度三十九分、東經百四十二度二十七分の海上に、高さ二十呎位にして、周圍約二哩の水礁を認めたり。と恰も露艦の報告に裏書をしたやうなものであつた。

問題は再燃した。英國支那艦隊司令長官は、二隻の軍艦を派遣して、取調させたが無い。明治二十三年には、日本政府でも、海門艦と扶桑艦とを調査の爲めに出張させたが『怪しむ可き白波も認めず』と云ふので、空しく引き上げた。

すると又、北緯三十六度四十八分、東經百四十二度三分に、形鯨背に似て、水面下に没し、怒濤ある時の外は破浪せざる一礁ありと、通告した者があつた。茲に於てか、明治三十五年十一月平遠艦の派遣となつたが、矢張り何物をも齧らさなかつた。

斯くて、無くて有るが如き此の島は、兎も角アビシニヤ礁と名稱て、P、D、符の下に、海圖に記入された。従つて附近を通る船舶は殆ど皆無となつた。

所が、明治四十年八月、行方不明となつた、捕鯨船長保丸(二百七十噸)は、金華山沖東北五十哩の海上で、暗礁に難破したといふ噂が、海員仲間に傳はつた。水路部では直ちに、人を派して、噂から噂を辿つて尋ねて見たが、遂に要領を得なかつた。

四十一年には三度武藏艦の調査となつたが、其れらしいものすら、見る事は出来なかつたといふ事である。

去りながら今日では、萬一の危険を慮つて、水路誌には、北緯三十六度十五分、東経百四十一度二十八分、或は北緯三十六度四分、東経百四十一度二十五分に疑礁ありと、記載されてある。

アビシニヤ礁の有無は、右の如く有無甚だ曖昧であるが、海員の多くは、寧ろ無からうといふ説が多いのである。

或る人は説をなして曰く、金華山・犬吠岬の沖は、有名な捕鯨漁場だけに、鯨の海上に身を浮べて、晝寝でもして居るのを見誤つたのではあるまいか、恠る例は外國などには、珍らしくない事で、度々聞く所だといつて居る。又或る人は、寒流と暖流の戦ひ

が、恰も巖に激する波の如きものが見えるのではなからうか。とも説明して居る。

要するに、無いだらう位では、貴重なる生命と船を預る船長が安心をして航海する事は出来ない。一日も早く有無を断定して貰ふ事は、一般海員の望むところであるのだ。併し之が完全の調査は、國民全體に海事思想が普遍されて、熱心な後援が出来た時に非ざれば、不可能である。

## ○海の女王—日本婦人

明治四十年一月三十一日、南洋マリアナ群島サイパン島のタナベ锚地(獨逸領マリアナ群島の首府ガラパン町の碇泊場)に、一

艘の帆船は、朝風に日章旗を翻しながら、徐々と進み入つた。此の時既に、白ペンキで船體全部を塗つた、一艘の帆船はガラパン町二湮沖に碇泊して居つた。日章旗を翻した船が、次第々々に近よつて來た時、件の白き船の艦には、獨逸國旗がヒラ／＼と掲げられた。其れと同時に、白き洋装の佳人が甲板に顯はれた。佳人は雙眼鏡を手にしながら、最と熱心に、進み來る日章旗の船を見入つた。日章旗の帆船は、三十九年十二月二十六日、房州館山港を出帆した快鷹丸であつて、三十八年十一月末日、鮫漁の爲めに小笠原島に行つた切り、行方不明となつた勇丸の搜索に遙々來たのである。

獨逸國旗を掲げた船は、二本マストのスクナー型で、噸數は約百二十噸、パウラーと號して、獨逸人フェザー氏の所有である。快鷹丸はパウラー號の傍らに錨を下ろして、旗の禮を交換した。雙眼鏡の佳人は、パウラー號の甲板上に在つて、飽かずも、快鷹丸を眺めて居る。快鷹丸は帆をたゝむで、錨の鎖を延ばし、諸般碇泊の準備全く整ふや、左舷の端艇を下ろした。端艇には數名の水夫と、一人の士官が乗つて、今や政廳に入港の手續をなすのである。佳人の雙眼鏡は端艇に向けられた。而して、端艇がパウラー號の近くを通つた時に、白きハンケチは佳人の手によつて振られた。遂には透き通るやうな聲で、

『モシ、モーション、日本の御方』

と鮮やかなる日本語で呼び止めるのである。南洋の一孤島、加之も獨逸帆船から、美しき女の聲で訛りない日本語を聞かうとは、一同の頗る意外とするところである。

佳人は其の時既に、雙眼鏡とハンカチを捨て、舢に手を突き、腰を屈めて、聲を限りに呼ぶのであつた。

併し此處は獨逸領である。獨逸官廳の許可を受けない以上は、徒らに他の船に行く事は出来ない。

一同は心ならずも、佳人の呼び聲を聞き捨て、疑問をパウラー號に残し、ガラパン政廳に赴いた。而して諸般の手續が終へたのは、日も漸く西の地平線に入つた六時過ぎであつた。

快鷹丸船中の其の夜は、彼の不思議なる日本婦人に就て、幾多の想像が、船員各自に交換された。

扱て二月一日の日が、心長閑かに明けると、未だ朝霧の霽れないうちに、快鷹丸の端艇は、パウラー號の左舷に着いて居つた。

甲板には三脚の椅子が置れた。洋装の佳人に相對して語る白服の青年は、此の物語を余に語つた柳悦多君である。他の一人は同じ快鷹丸の乗組員である。

三人の話は晝頃迄も續いた。此の間に交換された談話に依つて、佳人の不思議なる舉動は解れた。

柳君は本船に歸つて、其の佳人に就いて語つた。曰く。獨逸語も、英語も、却々流暢に喋舌つて、イヤに愛嬌を振り撒

く所を見た時には、適切に横濱あたりに居た、洋妾だと思つたが、驚いたよ。信州松本の高等女学校卒業生だと言ふせ。イヤ嘘ぢやない、話の具合から推して見ると、確かに高等教育を受けて居るらしい。

現に見給へ、アノ船は船長が即ち船主で、烏毛採集船だが、船内一際の事務は勿論の事、品物の受け渡し迄を、獨りで處理して居るのだ。

餘り深い事は云はないが、郷里に於ける彼女の家庭は、非常に亂れて居るものと見える。學校を卒業した年とか、何んでも一昨年だといふ話だ。自分の叔父とかい、妻に死なれて閨淋しきまゝ、あらう事か、現在自分の姪に、後妻とか、妾とかになれと強るの

で、先生其の破倫の甚だしきに驚いて、東京に逃げ出したのださうだ。

暫く東京や横濱にブラつくして居つた所が、人傳で聞くと、其の叔父なる者が、執拗こくも彼女を捜して居ると知つたので、寧ろ海外に行かうと決心したのださうな。

所が、旅行免状がなければ、外國に行く事は相成らんといふし、其の時の境遇では、自分で旅費を調達する事も出来ないのだからコリヤ一層の事、冒険小説にあるやうに、帆船の船長の妻にでもなつて海の女王とでも云はれて見ようと、フット思つた矢先き、パウラー號が椰子の實を積んで横濱に入港したのださうだ。すると、女王も却々偉いよ、自分自身船長に面會を求めて、『妾は貴方

の妻たらん事を望む』とやつけたのださうだ。對手は毛唐だ、話は頗る早い。『ザッツ、オーライ』で立ち所に定まつた。マア恣麼次第だ。

柳君の話が未だ了らぬうちに、パウラー號の端艇は快鷹丸を訪ふた。中に一等運轉士の米人ハルト君が居つた。

士官に對するには、士官に對する禮を以てせねばならぬ。ハルト君を船房に招じて、お愛想に日本酒を出した。之りや天下第一品だと賞めながら、獨酌をきめ込んで、一升程を平げた。

ハルト君の話では、パウラー號乗組員は十六名で、内十二名はチャモロ土人で水夫、運轉士は米人で二人。日本人は大工と彼の女王であるさうだ。然るに船長フェザーは、頗る冷酷で、吝嗇家

で船員仲間に不評判であるが、海の女王は却々に愛嬌よくいたはつてくれるに、一同は不平も云はず、忠實に働いて居るとの事である。

中にもチャモロ土人などは、彼の女王をマリアと稱して、拜むやうに服従して居るさうである。併し時々女王には、此の今日の自分を、郷里の人に見せてやりたいと、啣つて居る事があるとか。二人の話で、洋装の佳人が何者であるかは大概知れたが、聞き漏した事は、其の姓名であつた。

次の日の正午。パウラー號は、東北貿易風に帆を孕まして、何處へともなく去つて了つた。

海の女王は、其の去るに望んで、再び白きハンカチを、快鷹丸

に向けて、名残惜げに、頻りに振つたのであつた。

此の不思議なる縁を結んだ、二艘の帆船は、其の年の夏の末、相前後して難破して了つた。快鷹丸は朝鮮迎日灣に、パウラー號は此のガラバン沖に、共に破れて、一片の藻屑となつたのである。併しフェザー船長と、彼の女王とは無事であつた。二人が手を組み合せて、ガラバン町を散歩する姿は、朝夕土人等の眼に映じて居つたさうであるが、一昨年即ち四十一年の春とかゝら、フツト二人の姿は見えなくなつて、其後の消息は杏として知る人もないのである。

(確かなる話ではないが、海の女王は、フェザー船長と共に、スマトラ通ひの

露國帆船に乗つて、石油を運搬して居るといふ噂を聞いた事がある)

## ○啖人々種

森々たる太平洋の波は、煙波十萬里に連らなつて碧く、大小無數の島嶼は其の間に點綴されて、箇々各一乾輿をなして居る。其の數は珊瑚島のみにて、六百七十有餘と註せれるのである。試みに海圖を擴げて見るならば、誠に人をして曠世の感あらしむるものがあらう。

日本の南、赤道の北に、彈丸黒子のやうに出没するものはミクロネミヤ州である。赤道直下を越えて南半球に入ると、ニウーギニアの大島、ビスマーク、ソロモンの群島が在つて、濠洲の大

は此所に萬疊の波を押さへて控へて居る。此の濠洲大陸の地脈が、蜿蜒數千里にして東の方太平洋に盡きると、直に東南に崛起して新西蘭となる、此等の大陸、群島と南北兩亞米利加の間に星羅棋布するものは、フキジー、ニューカレドニア、ロヤルチー、トング、サモア、タアチ、マーキサス、チユバイ、中央ポリネシヤ、布哇の諸群島である。

今日は既に此等細爾たる諸島にも、二十世紀の文明は普及されて、悍惡兇暴なる土人は殆ど其の趾を絶ち、到る所の島に白人の姿を認められるのである。

現にフキジー群島のムバウ島の如きは、廣大なる基督教會が建設されて、啖人々種も今は既に、歐米諸國の基督教信者と共に、

耶蘇の御弟子となつて、白人の兄弟姉妹となつて居るのである。此の島に於て僅かに昔を思ふ兇惡なる土人の遺物は、其の大寺院の中央に置かれてある、洗禮の儀式に用ゆる石臺のみである。石臺の上部には窪める所があつて、之れに聖油を盛り、信者の頭髮を洗ふて、聖なる神の御旨を傳へるのであるが、彼等土人が未だ文明の恩澤に浴しない當時にあつては、此れこそ聞くだに戰慄する事柄を演出する、唯一の道具であつたのである。

彼等が所謂神靈に祭祠する口になると、數十人の土人は相會し、石臺を中央に据ゑて、俘虜を誘ひ來たり、これを捕へて其の頭を石臺上に置き、忽ちにして石棍を取り、痛撃して顛顛を粉碎し、氣息の絶滅するを見て神靈に捧げ、尋いて老幼男女相抱いて、肉



を炙り、海水に和して鹽梅し、舌を打ちて賞味したものだといふ事である。

併し今日では、此等の話も唯聞くだけで、目のあたりに見る事は出来ないものである。最も瘴猛なる啖人を種であるニウギニア土人も、余がポネビー島の記事に於て説いた如く、獨逸政府の忠實なる兵士として、柔順に働いて居る位であるのだ。

所が最近和蘭領ニウギニアから歸朝した余の知人の語る所によると、山中の土人が本年(四十二年)の春急に反抗して、白人居住地附近に在る少數の土人に向つて戦闘を開始した、と同時に彼等は昔の風俗に歸つて、男は勿論女までも丸裸となり、犢鼻褌やうなものすら着けずに山中を横行し、再び人肉を喰ふやうにな

つたさうである。

其の人の語る所では、彼等が人を殺して肉を喰ふ事は、宗教上の迷信であつて、自分の部落の一人が、他部落の者に殺されると殺した部落の者の肉を喰はないうちは、亡者が成佛しないのだと信じて居る故である。去れば互に絶す復讐を事とするやうになつて、一度戦闘が開始されると、遂に止む時がない程であるのだ。従つて争闘が激烈になると、一日として休む事がなく、果ては人肉が彼等の常食と迄なるのである。

而して彼等が其の肉を喰ふや、普通は煮て喰ふのであるが、時として息の根の絶て居ない者の肉を割いて生のまゝ食ふ事もあるさうである。併し女の肉と子供の肉は決して喰はない、之れは女

や子供の肉を喰ふと女や子供の如く柔弱になるものと信じて居るかららしい。

これは七八年以前の事であるが、獨逸領で十五人の獨逸人と二人の英人が、彼等の爲めに殺された、而して死骸はその儘に放置してあつたので、彼等は何故に白人の肉を喰はぬのかと非常に不思議がつて土人に聞くと、其の答が甚だ振つたものであつた。幾年か前に、白人を殺して喰ふて見た所が、煙草臭いので旨くなかつたから、遂に喰はぬ事に定めて了つた。といふので白人は安心して、彼等の部落に入る事が出来るやうになつたのである。然るに日本人は白人に反して、非常に美味さうで、彼等の仲間には珍重されるのである。四十一年の夏と記憶する、日本帆船

の船長某が、英領ニューギニアで土人に殺された事があつた（此の事は當時東京の各新聞に詳細に記載された事があつたので讀者諸君の中には記憶されて居る人も多いだらうと思ふ）、其の肉が又素晴しく美味かつたので、爾來彼等は其の船長と同じ人種だと聞きさへすれば涎を垂らして、ギョロ／＼見るので、或る時、日本人数名が集まつた席上で、恁麼話が持ち上つた事があつた。誰れか煙草をよく喫ふ者が、俺は日本人だ、例の船長と同人種だと名乗つて、土人に喰はれて見たらよからう。是れも煙草臭くつて旨くないと、嫌つてくれなにとも限らない、さうすると吾々も、堂々と彼等部落に遊ぶ事が出来るやうになるではないか。といふのであつたが誰れ一人、此の犠牲にならうといふ者はなかつ

たさうだ。

日本人も飛でもない所に、飛んでもない最良があつたものだ。

### ○南洋土人の全滅

余がクサイ島を訪ふた時、島の王様と一日の閑談を試みた折、一時熱病が流行して、島民の斃れる者が多かつた事を物語つた。爾來種々なる書物を調べて見た所が、同島が急激に人口の減少を來たして居る事を知つた。

西暦千八百五十三年一月、クサイ島を訪ふた英のサーベント號の艦長ハムメット氏の報告を見ると、人口千二百餘ありと書いてあるが、次で千八百七十二年、ロツサーズ氏の北太平洋水路誌

には、凡そ七百とある。近く明治十九年、吾が筑波艦が寄港した時には僅か四百であつたさうだ。而して余が訪ふた時には漸く三百人を出でないのであつた。之れに依つて之れを見ると、人口の減少する傾向のある事は確かなる事實である。

由來劣等人種が、優等人種に交はると、精神上に、身體上に、軒輕する事が出来ないで、萬般の職業に敗けて、竟に衣食住を失ひ、人口の絶滅するに至る事は、北海道の蝦夷土人を見ても解る次第である。或る人は又云ふて居る、火酒や焼酎等の如き多量にアルコールを含むものを、飲む事を覺えて、精神上にも肉體上にも諸般の攪亂を生じて、遂には短折、天死を速くする事も原因の一つであるであらうと。

併しクローサイ島は外人との交通は甚だ繁くない。殊に同島は基督教に教化されて、復た何等の酒料をも用ひないのである。暫くは此等の事に就て説いた、諸先輩の言を聞いて見よう。

長老ウキリヤムス著、布教記事中には、余が南洋諸島に寄寓して居つた間、數々土人社會に、熱病の流行したのを目撃した。此等の疾病は多く、外國船舶から輸入した事は、争ふ可らざる事實であるが、輸入したと云ふ船舶について、詳細に探查して見ると、其の乗組員中に、一人の熱病に悩む者なきを發見したと書いてある。

ピーチー氏の日誌には、ピトケヤン島の住民は、外國船の來到する毎に、皮膚病其の他、畏る可き悪疾を感染すると謂つて居る。

此のピトケヤン島に就ては一條の面白い話がある。序でなれば書いて置く。同島は元來無人島であつたのが、今から凡そ百年前、英國軍艦パウチー號が南洋諸島を巡航してタヒチーといふ島に寄つた時に、水兵共は相謀つて、艦長プライイ氏を縛つて其の軍艦を奪ひ取つて了ひ、タヒチー島土人の婦女を各自二三人位宛携へて、此のピトケヤン島に移住したのである。勿論其等の水兵は、皆な此の孤島の土となつて、今は彼等と土人の雜種のみが住んで居るのである。

其の他マツクルロツボ博士の西島誌やヴァンクローア氏の航海日記などにも、外國人の來着する毎に、土人が病氣に感染する事を證明して居る。

右の事實に依つて推論して見るに、クーサイ島に流行した熱病も、此の地固有自發のものでなく、外より輸入したものと見るが至當であらう。假令壯健無病なる人にでも、身體羸弱なる土人が交はると、直ちに之れより疾疫の分子を受領する事もあると云ふからには、余の如きも疾疫の分子を幾分か、クーサイ島に残して来たかも知れない、思へば思はぬ罪を犯したものだと言更らに思はれる。

要するに劣等人種は遠からず渾圓地球上に、棲息する事の出来な  
い運命を持つて居る者と云はねばならぬ。ニウーギニア土人が如何に瘴惡でも、ソロモン土人が兇暴でも、遂に彼等種族は今後百年後には見る事は出来なだらうと、獨逸探検船ペーボー號の船

長は語つた。

### ○海の知識

諸君、日本の少年諸君よ、吾々が亞刺比亞の肥馬に跨り、里昂の輕装に身を纏ひ、カシミルの毛織に暖を取り、ペーリング海邊の毛皮に寒さを防ぎ、パナマの帽子に暑を凌いで、南洋諸島の香料に疲勞を慰し、トランスパールの黄金を積み、アマゾン河畔の寶石を飾る事の出来るのは、何に由つて然るのでせうか。此の小さき島國に在つて、三帶の氣候に體温を補ひ、五州の土壤を以て、其の身軀を肥し得るのは、實に海の運搬力に依るのであります。海力は夥大なものでありまして、幾萬噸の船を幾百千艘浮べ

まして、其の支へる力は、尙ほ有り餘るのであります。地球を三分して其の一は陸地で、五千三百萬方哩ありますが、海の面積は一億四千四百萬方哩もあつて、其の二を保つて居るのであります。此の森漫渺茫たる海は、吾々が船で航海するに任せて、何らの障害を與へぬのであります。何と便利なものではありませんか。

現今の世界に於ては、大陸内部の不毛の地の外は、一步も冒すの餘地なきに當りまして、此の便利な、共通の海洋は、吾々人類自由の競走に委されてあるのであります。獨逸皇帝は、自國民に向つて警告なされまして。

國民活動の舞臺を海洋に發見せよ。國民生活をして海洋と密接

の關係を保たしめよ。版圖を波濤の上に擴張せよ。國民をして陸上の生活より一轉して、海上生活に移らしめよ。海上生活を敢てする能はずんば、遂に世界を家として活動飛躍するの時期ある事なし。

然り、次に來る可き吾々の世界は、海上であります。然るに四面海を繞す日本の少年は怎でありますか。自ら海國男兒など、威張つて居るに似合はず、頗る海事思想に乏しいであります。現に海とさへ申せば、怒濤狂瀾縦横に荒れるものとのみ思つて、難破船の外には、何ら海の物語がないのではありませんか。

私は今此の席上で海の平穩な事を、概略申述べたいと思ひます。今年春、稀有な慘事を演出しました、鹿島灘に就て、其の風力

を最近十六ヶ年間統計に取つたものを見ますと、一年三百六十五日のうちで、強風（一秒時間に十六米突を走り、樹木の枝を漸くに揺がす程度のもの）以上に及ぶ事は、百二十六日と五といふ割合になつて居ります。

之で御覽になつてもお解りでせうが、海は諸君の想像して居るやうに、常に荒れて居るものではありません、静穏なる海の景色は、實に晴れくとしたものであります。

漫々たる鏡のやうな海面を、軟風一陣、之を撫ると、連波交々起つて、激濃並び生じて、満面に喜色を帯びるやうであります。朝の景色などは、又一層で、朝暾僅かに水平線上に現はれると、曙光燦然として、金波を漂蕩いたします。此の絶景を恣にして、

蒼穹を笠にかぶり、陽光を衣となし、海風に浴しながら、私語く波を枕とするなどは、所謂陸の人の想像を許さないものであります。よし又、暴風雨が襲ひ来しても、船は徒らに覆るものではありません。波の爲めに沈没した船は、其の數頗る少ないのであります。暗礁に乗り上げて難破しましたり、船火事の爲めに行方不明となりました話などは、聞かぬ所ではあります。今日では航海術が発達しまして、精密なる海圖が出来、此等の災難も餘程減じつゝあるのであります。

海上保険に従事して居る人の話であります。陸上で天災の爲めに死ぬ人と、海上で生命を失ふ人とは、其の比例の方が多いさうであります。たゞ海の出来事は、人の注意を、より多く惹き

ますのと、一時に少なからぬ死者を出しますので、如何にも其の人数が多いやうであります。事實は全く反對なのであります。殊に、白晝帝都の真中で、電車が横倒れとなつて、人命を害ねたなどの、馬鹿氣切つた災難は、海上には絶対にありません。海は恁くの如く、諸君の思つて居られるが如くに、危険なものではありません。ソレは成程、陸の上よりは、豫期されさうな危険は多いではありませんが、其れなどは國民全體に、海に關する思想が普遍されて、航海に熟練した人が多くなれば、多い程、其の度合は減じて來るのであります。故に、たゞ海は怖ろしい、危険なものだとのみ思つて居つては、何時迄たつても、海に親しむ事は出來ません。

諸君よ、吾が親愛なる少年諸君よ、私は切に望みます、諸君は海に關する知識を、充分に養はれん事を。

### ○鹹水と淡水

遠洋航海に於て、最も船員の心を勞する事は、暴風雨の襲來する事よりも、暗礁の多い事よりも、飲用水の缺乏する事にあるのだ。

水上に生活して、水が不足するとは、字句の上からは、頗る奇妙であるが、元來海水には、鹽分を多量に含んで居るからである事は、敢て説明する迄もない。

然らば、若し、海水をして、淡水たらしめたならば、航海者に



は、非常に便利であらうとは、直ちに少年諸君の腦裡に浮ぶ事だらうと思ふ。

併し、少年諸君よ。若しも、海全體が淡水となつたならば、飲用水には事缺くまいが、船舶の航海には、危険が多くなるのである。

海水に鹽分が含まれて居ればこそ、比重が重たく、従つて載積量も澤山になるのである。載積量は、造船術の進歩に因つて、或る程度迄は、補足し得るが、波濤の大きくなる事は、人工を以て、如何ともする事は出来ないのである。

海員の語る所では、海洋に於ける波濤の高さは、普通十米突を越ゆるものは窄れである。ケープ、ホーンや希望峯などでは、十

三米突から十五米突（五十尺）に及ぶ事もあるさうであるが、其れは實に稀有の高度を示したものである。

之れに反して、バイカル湖の如き淡水湖では、波の高さも二十米突以上に達する事があつて、殆ど船舶の航行を許さないのである。近頃は聞かないが、以前は時々、幾千の生靈を乗せた船が、魔女バイカルの波に覆されたと云ふ慘事が、新聞の電報欄などに見えたやうに記憶して居る。

此等淡水湖は、波の高いのみならず、強風一陣去つた後でも、餘波却々に収まらないで、怒濤巨浪は、尙ほ數日に亘る事もあるさうである。去れば、静かなる軟風にも、小波は立つて、海の如く油を流したやうな、滑かな水面を見る事は、全く不可能の事に

屬するのである。

以上は唯單に波濤のみについて語つたが、潮流なども、若し淡水であつたならば、如何なる現象を呈すであらうか。

學者の説く所を聞くと、地球の自轉に由つて、茲に東北貿易風と東南貿易風が生ずる。聽て此の風が吹き續いて、海水を押し流し、遂には潮流が生ずるのである。故に潮流は、地球自轉の反對の方向に、絶えず流れて居るのである。

して見ると、其の風力や風位の變化に連れて、潮流にも變化を來たさねばならぬ。併し、現今の調査では風力や風位の變化する程に、其れだけ潮流に變化を來たすものではない、此の事實は直ちに以て、海水が風力に感應する事が、左程に容易でない事を證

明するものである。若し、之れが比重の軽い、軟風にも小波が騒ぐ淡水であつたならば、僅かな風力の差でも、潮流には大變化を來たし、航海者をして航海難を嘆せしむる事も夥しいであらうと思ふ。

造化の神のなし給ふ所、實にや、深き工が施こされて居るものである。

### ○無風帶物語

帆船航海の最も困難とする所は、無風帶を横斷する事である。吹く風を頼りに、渺茫たる大海を、航海する帆船が、其の生命とする、風なき所に行つては、木から落た猿同然どころの話では

ない。實に慘澹の極である。

其の無風帯が、太平洋の真中に、三ヶ所ある。

赤道を中心として、太陽の直射に連れ、南北に異動する一帯は、

その最も大なるものであつて、且又、絶対に無風の區域である。

南北の兩半球に於ては、貿易風と反對貿易風との間に、ホース、

ラチツエドと稱する無風帯が各一所宛介在して居る。其の區域

は頗る狭い上に、時々瀕死の病人の苦き息のやうに、軟風が吹

くともなく來るので、假令遅々たりと雖も、船は進行し得るので

あるが、赤道無風帯は、其の軟風すらもないのである。

風なき赤道無風帯は、徒らに、滄波萬疊鏡の如きもので、海水

は淀んで、一寸の流潮すらもない。空は彌が上にも晴渡つて、一

片の卷雲すらも認められない。蒼き空は、海に寫つて、海水の色  
益々深い、此の蒼天と碧水との間に、ポツネンと浮ぶ帆船こそは  
前に進む事も、後に退く事も出来ない。加之も靜寂なる天地には  
訪ひ來たるべき風は永劫ないのである。

恚る時、補助機關のなき帆船にあつて、採るべき手段は、唯一

つある。端艇を下して、本船を曳くのである。

六打位の小端艇で、百噸、二百噸の大船を曳く圖は、頗る不恰

好なものであるが、此の場合、他に方法はないから止を得ぬので

ある。

本船の舳からは、繩を下して端艇の艦に結ぶ、端艇は船長の命  
じた針路に向つて、たゞ無精と漕ぎ續けるのである。元來、熱帯

の海の水は、非常に重いものであるに加へて、此の邊は全く海水が流動しない故か、オールの尖端に、力が籠つて存外船足を早くする事が出来る。

最初五分許り、馬鹿にオールは重い、一度本船に船足がつけば、油の上を這るやうに、心持よく走るのである。一時間二漕は、其の平均速度であるが、三四漕は楽なものだと、隅田川邊をブラついて居る水夫など威張て云ふ位だ。

無風帯の幅員は、季節に依つて異にするが、普通六七十漕から、百漕餘に亘るのであるから、一日三十漕を漕いでも、三四日は漕ぎ通さねばならぬのである、初めの一日位は、單調な航海に飽きて居る水夫などは、物珍しく、面白半分に漕いで、苦にもならな

いやうであるが、扱て、次の日からは、少からずヘコ垂れて、オールの力も抜け勝になる。茲に於てか、舵手は、音頭を取つて、唄に、無風帯を漕ぎ通すといふのだ。

潮風に銅色になつた老水夫が、錆のある低い調子を、餘韻長く引張つて

「七つ下りによ！」

と、聞たる天地の静肅を破ると、向ふ願卷の若い連中は、痾高い聲を合せて、

「女郎が来る、そかよ！」

と合せる。太平洋の真ん真中で、悠々と唄に調子を合せて、端艇を漕ぐなどは、實に洒落て居る。

小波どころか、ウネリさへない静かな此の海を、南へなり、北へなり、眞一文字に抜けると、貿易風は、一定の方向に、一定の風力を以て吹いて居る。既に貿易風帯にさへ入れば、唯帆を捲きさへすれば、船は心地よく風を孕んで、波を押切り、船長の命するがまゝに走るのである。

が併し、若し此の無風帯を斜に、島から島に、航海せねばならぬ時は、什麼であらう。爽快な而して氣樂な、東北貿易風と、東南貿易風が、三四日の眼前に在ればこそ、水夫も唄の調子に釣り込めて、漕ぎ通す元氣もあるが、一週間以上になると、天地何らの變化がない、この四圍の風光に、何れも全たく瘦瘠して了うのである。

人間は恁麼時には、カラ意氣地のないもので、風死して、雲なく、波もない間に立て、單調な生活を一週間も続けると、遂には何事にも、懶氣となつて、一指を動かす氣力まで無くなり、終には、自分の生命すら顧なくなつて、其の儘に、自滅して了ふさうである。

故に、海員の間には、幾多の死骸を載せた船が、幾艘ともなく、無風帯には、漂ふて居るものだと、云ひ傳へられて居るのである。

### ○帆船航海の安全

帆船の航海程安全なものはない。  
元々、風と波とで、航海するやうに出来て居るのであるから、

海の上なら風さへあれば、何處へでも行く事が出来るのである。然るに汽船となると、人間の智慧で細工した機械を生命として居るのであるから、絶対に安全なものとは云はれない。若し其の機械に故障でも生じやうものなら、直ちに進行は中止して、一歩も思ふやうに走る事は出来なくなる。又ソレが、兎角故障が起り易いのであるから、實に危険千萬といはねばならぬ。

試みに、大洋の真中を走つて居る汽船の機械が破損して丁つて、全く其の用をなさなくなつたと想像し給へ。

船は忽ちに自由を失つて、風と潮とに身を任せねばならぬ事になるだらう。所が元來自然力に反抗するやうに造られて居るのだけに頗る悪い。風と波とに翻弄されて果ては、引導を渡される事

になるのだ。

若し又、幸ひにも引導だけは救かつて、思ふに任せぬ身體だから、潮に従つて流れるより外に策はない。流れに随つて行く船の舵は、全然利くものではないのである、だから、島の附近に漂着しても、流れは島を除けて去つて了ふので、島を見ながらに、島に取りつく事は出来ないのである。

斯廢事をして漂流して居るうちに、他の船にでも見つかつて、救けられれば勿怪の幸ひであるが、さうは却々問屋が卸さない。日數が経つに従つて、飲用水は缺乏して来る、燃料は無くなる。日一日と瘦せ衰へて遂には自滅して了ふ。今更ら地團駄を踏だ所が、天から米を降らしてくれる筈はないのだ。マア何と怖ろしい

事ではあるまいか。

之れに反して、吾が帆船は、破れるやうな機械などは一つもない。船の動く動力は神の此の世に下し賜ふた風のみであるから、神様が、此の世から、風なるものを取り除いて了はない以上は、此の一億五千萬方哩の大海を横行する事が出来るのである、但し其れは、無風帯といふ一小部分を除いての話であるか。

殊に帆船の誇りとする所は、小船でよく大洋を航行し得る事である。十二三噸の小舟で、白令海に海獣を三四ヶ月の長き間、追ひ廻す事などが出来るのである。

汽船で二十噸位なら、少し風のある日は、東京灣すらも横断は危いのだ、ソレとコレとを比較して見ると、其の安全な點に於て、

非常な差異があるではないか。

併し乍ら、帆船は定期の航海が出来ないのである、或る時は早く或る時は遅く、殊に甚だしいのは、同時日に同じ港を出帆しても尙ほ、同時に同じ港に達する事は殆どないのである。

明治三十九年夏、志州鳥羽港を出立したパーガンチン型英國帆船は、北米晚香坡迄僅かに十三日で走つた。然るに其の翌年、同月日に、余が便乗したスクーナ型帆船は、横濱を出帆して、北米南部アラスカに向つたが、航程に於て約一千餘哩も近いにも拘はらず、六十四日を費して漸くに達した。

又近くは、本年春二月十五日、南洋マリアナ群島サイパン島を出發した、雲鷹丸は、グアム島、琉球那覇などに寄港して、悠々

漁撈の練習をしながら、三月二十五日館山港に入つた。去るにても、日東丸は二月十六日同港を出て、一直線に針路を内地に向けたが、殆ど同時日に東京灣に入つたのであつた。

とは云へ、大概の航海日数は、ほゞ豫定は出来るのである。日本沿岸ならば、夏は南風、冬は北風が多いといふ事が、一年に春夏秋冬のある如く、定まつて居るので之を利用して行くから、左程大それた差が生じないのである。

兎も角、帆船は右の如く安全であるから、欧米の富豪は、遊覧船として、多く帆船を用ゆるさうである。ソリヤ遊覧船としては、最も適當であらうと思はれる。石炭を焚かないから、甲板は常時綺麗ではあるし、機械の不愉快な響はなく、進水器の震動などは

絶えてないから、其の動搖も實に緩やかである。鉛のバラストでも積んで、船房を取り擴げたら、嘸ぞや爽快な航海が出来よう。費用は入らずして誠に海國人民の娯樂に適當しい。帆船の安全な事を説いて、茲に日本の富豪に、帆船遊覧船を造らん事を勧める。

### ○帆船の乗組員

帆船生活を知らずして、海上生活の爽快を説く可らず、海上生活の真味は實に帆船生活に存するのである。

風と波とに身を任せて、船底一枚下は地獄の上に、擾々たる浮世の煩累を脱して、四望限りない大海原を、縦横無盡に翔り歩く



這般の消息は敢て、陸の人の想像を許さぬ處である。  
今此の生活を營む、乗組員の事に就て、ホンの概略を説明せうと思ふ。

船と名のつく以上は、一船の死活權を握る船長は缺く可らざるものだ。其の船長の資格は船の種類に依つて異ふが、帆船にあつては、遠洋航海に従事するものと、近海を航海する者との區別をする。此所には専ら遠洋航海に従事するものに就て書くのであるが、同じ遠洋航海するものでも、二百噸以下の帆船では、甲種一等運轉士の免狀を有する者を、船長に補任してもよいが、二百噸以上になると、甲種船長の免狀を有するものでなければ、其の任に當る譯にはいかないのである。

船長の次席は一等運轉士で、其の資格も船長に準して異ふが、要するに、軍艦に於ける副艦長同様、船長の意を受けて萬事を處理する役柄である、恰も一家庭に於ける女房とも云ふ可き位置で差詰め船長は亭主役である。

其の又次席は二等運轉士であるが、船が小さければ水夫長をして、之れに代らしむるが普通である。以上の三名と事務長を艦の人と稱して、士官待遇にするのであるが、若し又、長途の航海に上る船であるならば、船大工を士官として乗込ませる事もある。下級船員は炊夫、水夫、給使等で、其の人数は、船の大小に依つて異にするが、二百噸内外のスクーナ型（横帆のなき船）にあつては、水夫は八名から十名もあれば、船を操縦され得るものと

してある。炊夫、給仕は各一名宛で充分間に合ふ。現今我國にある帆船の九分迄は、此のスクーナ型であるのだ。扱て、右の内船長は航海中絶対的権能があつて、専制國の國王陛下にも比すべき程、威令共に行はれるのである。従つて其の責任も重大大で、船に關する事件は、其の如何を問はず、凡て自分の双肩に荷はねばならぬのである。

現に恣便規則がある。港の出入には、船長は必ず舵手の傍らに立つて、自ら命令を傳へて居らなければならぬ。若し之を怠つて、衝突でもした時には、假令過失は先方に在つても、罪は其の船が負はねばならぬ事になつて居るのだ。併し此等の事は、出船入船の時のみで、大洋を走つて居る時の船長は、頗る氣樂なものである。

る。唯空晴れた日に太陽の高度を計つて、英吉利西グリニッチ天文臺の時間を示す時計コロンメーターと對稱して、現在船の位置を計算するの外は、全く何等の用事もないのだ。大體の方針は航路に定めてあるので、大暴風雨の來たる時の外は、船長室にあつて威張つて居れば、其れで濟むのである。

船長に反して、航海中最も關しい役は一等運轉士だ、先づ其日其日に航海日記を認めねばならぬ。此の航海日記は、船が衝突したり、難破した時、乃至乗組員が死亡した時などには、唯一の證據書類ともなり、證明書ともなるのである。

マダ日誌などは片手間に出来るが、船内の諸道具の整理から、消耗品、食料品の監督までもして、乗組員の指揮命令を直接船長

に代つてせねばならぬのだ。最も面倒で且少しも怠る事の出来な  
 いのは、コロンメーターの螺旋を捲く事である。渺々たる大洋の  
 真中に在つても、船の位置を知る事の出来るのは、唯一に此の  
 コロンメーターあるに由るのだから、羅針盤よりは數倍貴重品であ  
 るのだ。所が元來其の時計なるものが、金屬製の人工物だけに、  
 寒暑の變や、螺旋捲く力の摩擦にも狂ひ易いので、取扱が頗る  
 面倒であるのだ。だから其の螺旋を捲くや、時間を定めて、手加  
 減を馴らして、念に念を入れて、鄭重にせねばならぬので、氣骨  
 の折れる事も、普大抵ではないのである。此等煩雜な仕事を一身  
 に引き受けて、尙ほ四時間交替の當番には、甲板に立つて、潮風  
 に吹かれねばならぬのだ。

二等運轉士や水夫長は、直接に一等運轉士に隸屬して、水夫の  
 監督をする事になつて居る。而して四時間交替の當番の時には、  
 一等運轉士と共に、一方の旗頭となつて、甲板に出て、帆の上げ  
 下しを命令すればよいのである。

此の當番といふのは、水夫全體を二組に分けて、一を一等運轉  
 士、他を二等運轉士なり水夫長が指揮して、四時間交替に甲板に  
 立つて、風次第で、帆を張つたり、絞つたり、時には受け替へな  
 どをするのである、勿論舵手は其の内から一人が替るゝ人に當  
 るのである。若し風の方位が定まつて、帆に用事がない時には、  
 帆繩を縛つたり、甲板を掃除したりする雑役をもするので、四時  
 間の間は、絶えず身體を働かす譯であつて、一寸の暇もないので

ある。

船では三十分毎に時鐘を打つて、時間を知らせる。其の鐘打つのも當番の一人がするので、交替時間三十分前には、次の當番の者を寢床から叩き起して、スタンバイ（準備する事を船員は慥くいふ）をさせるのである。此の交替順には不公平のないやうに、午後四時から六時迄と、六時から八時迄との二時間當番を作らへて、晝夜の交替をもさせるやうになつて居るのである。

次に炊夫は名の如く賄方である。獨逸の帆船などでは船長に直屬して、却々に威張つた者であるさうだ。日本の船でも、炊事場は一種神聖な場所としてあつて、水夫達の徒らに侵す事を許さないものである。故に若し水夫と炊夫とが喧嘩でも始めた時に、其の

喧嘩場所が炊事場であつたならば、事の善惡を問はず、罪は水夫に歸するのである。之れは炊事場に、刃物などがあるもので、氣の荒い水夫は、亂暴をしないとも限らないから、恣意習慣性の規則が出来たのであらう。

右はホンの帆船乗組員の概略を説明したものである。

南洋群島珊瑚島探檢記

著作權所有

(定價三十錢) 珊瑚島探檢記

<p>明治四十三年十二月二日印刷 明治四十三年十二月五日發行</p>	<p>著者 岡 雷 平 <small>東京市日本橋區本町三丁目八番地</small></p>	<p>發行者 大橋新太郎 <small>東京市小石川區久堅町百八番地</small></p>	<p>印刷者 水谷 景 長 <small>東京市小石川區久堅町百人番地</small></p>	<p>印刷所 博文館印刷所</p>	<p>發行所 博文館 <small>東京市日本橋區本町三丁目</small></p>
--	--	--	---	-------------------	--

海軍少尉 阿武天風君 著

# 上海生活譚

全一冊四六判四百頁  
口拾三色版壹集  
珍奇寫真版四葉

本書は著者の經歷と多  
大の見聞とを經緯とし  
て海の人のやさしき吟  
懐と逞しき抱負とを記  
述せるもの海軍志願の  
青少年は云ふに及ばず  
苟くも潮高く鳴る海洋  
の男性的精神を好愛す  
る者は先を争つて耽読  
すべきものなり眞に是  
れ讀書界の快著

正價金五拾五錢  
郵税金八錢

(版出館文博)

冒險壯遊 世界記者 河岡潮風君 著

# 五洲奇怪譚

全一冊洋裝四六判美本  
紙數四百十二頁  
寫真版數葉挿入

○鐵腕の船長 ○南國橫  
行記 ○海賊帆走船 ○氷  
中別天地録 ○黒手脅迫  
狀 ○シヤム象狩 ○痛快  
男子 ○比律賓の少年 ○  
狒々海上暴行 ○ハワイ  
鐵獵 ○小便の十六日 ○  
響尾蛇の冒險 ○大河突  
破 ○四年 ○ヘレケ開  
下 ○沈み行く船の悲劇  
○帝國水兵豹退治

正價金五拾錢  
郵税金六錢

胃險世界主筆 押川春浪君編  
 中村春吉 自轉車 世界無錢旅行

全一册四六判洋裝  
 紙數三百八十頁  
 寫真版八葉入

書中險山あり、激流あり、妖女あり、俠士あり、忽ちにして變境の凄月、忽ちにして大汽船甲板の競技、千變萬化の變勇は行は何人も痛快を叫ばずに居られまい

正價金卅八錢  
 郵税金六錢

(版出館文博)

讀賣新聞記者 松川木公君著  
 樺太探檢記

全一册菊判布表紙  
 寫真版八葉挿入  
 紙數百八十二頁

是れ著者が凍寒の樺太を踏破して其真相を描ける書なり世中寒山あり高嶽アイヌあり氷漬の水伊乃あり記事奇に富み文に興味多し狹地の秘密を知らんと欲する人は必ず此少壯の勇者が齎らせる一巻を求めざるべからず

正價金卅八錢  
 郵税金六錢

●破天荒の大探検●

五大洲探検家 中村直吉君 冒険世界主筆 押川春浪君 共編

●發行所 博文館●

五大洲探検記

四六判洋装美本紙製各冊三百頁以上 正價金四拾五錢 郵税各各巻別版數挿入(風俗風景其他) 各冊金四拾五錢 金六錢

第壹巻 ●亞細亞大陸橫行 (踏破の範圍) 朝鮮、支那、暹羅

次 目 ○破天荒の壯圖 ○富士山頂の訣別 ○那珂博士と大阪會す ○九鐵全線の無貨乗車 ○長崎に入る ○危く乗り後れんとした ○不思議な伏魔殿 ○韓鎭の密航 ○大邸の豪傑 ○山中に賊と格闘す ○客を以て米を搗く ○美人の密航 ○馬賊? ○刺殺? ○苦力、無給貨車、常駐御前 ○蘇州 ○義の同文書院 ○柴山海軍中尉人力車より落つ ○西湖十景 ○蘇州 ○浙江省に於ける製糸業 ○船中の珍談 ○纏綿たる別離の悲嘆 ○夜半の大上本

第貳巻 ●南洋印度奇觀 (踏破の範圍) 南洋諸島及印度

次 目 ○快男子岩本千綱君 ○新嘉坡の醜業婦 ○甲板客の自然主義 ○赤道○家庭の大惨事 ○南洋探検家副島八十六君 ○瓜哇珍談 ○スマトラ島探検 ○彼南に於ける幻燈會 ○猛の如き婦人誘拐者 ○林中の冒險 ○馬來半島を經て緬甸に入る ○秘密乗車 ○汽船ラン號に於ける奇遇 ○牛糞の如き印度人 ○スードラの奇習 ○厄介な波羅門 ○天下の奇習 ○波羅門の苦行 ○亂暴極る宗教的儀式 ○珍餘録 ○迷信で凝固した印度 ○汽車中、珍事 ○佛陀伽耶の佛跡 ○壯麗なる佛都アグラ府 ○印度南部の旅行 ○汽車轉覆の大惨事 ○野蠻極る拜火教の葬式 ○愈々變境探検の途に上る

第參巻 ●鐵脚縱橫 (踏破の範圍) 印度の一部、波斯、土耳其、希臘、伊太利、佛蘭西、英國、埃及、西班牙、葡萄牙、マテイヤ島

次 目 ○孟買出發 ○英國官憲變境橫斷を拒む ○沙漠の驛傳旅行 ○嘘! 沙漠! 沙漠! ○厄介極まる波斯街道 ○儀仗騎兵に警られて總督訪問 ○馬鹿野郎 ○郵便局で机の上に寝る ○十日間の汽車旅行 ○波斯の上古史 ○波斯の中古史 ○波斯の中世史 ○波斯雜事 ○露助の密航 ○蟲を發見せられて下船を迫らる ○金角灣頭夜半の上陸 ○主權者の暗殺恐怖病 ○厄介な帝王 ○珍妙な思議の上覽芝居 ○バルカン半島より伊太利に入る ○羅馬の古跡 ○巴里で又も蟲の苦情 ○光輝と暗黒の巴里 ○スコットランドに向ふ ○倫敦發の急電 ○北部亞非利加に向つて出發 ○埃及の金字塔外數項

第四巻 ●阿弗利加一周 (既刊) (以下逐次刊行)

●踏破世界の五十萬哩●



小説

著君水蔭見江庵濤怒

# 探檢女王

- 全一冊袖珍美本  
紙數四百五十頁
- 海底女王○怪船美人
  - 龍の化身○天幕生活
  - 廟の妖女○惡魔の家
  - 島の姉妹○秘密の匣
  - 生蕃復讐○怪島の娘
  - 漂流少女○無名王國
  - 海獸獵者○戰の飛沫
  - 鰐魚退治○捕鯨探檢
  - 富士相撲

正價金四拾九錢  
郵稅六錢

(版出館文博)

水蔭君著書

●大蠻勇 正價五拾錢 郵稅八錢

●少年探檢隊 正價卅八錢 郵稅四錢

●捕鯨船 正價卅五錢 郵稅六錢

●地中の秘密 正價五拾八錢 郵稅八錢

●地底探檢記 正價四拾錢 郵稅六錢

●水蔭叢書 正價貳圓 小包十六錢

●牡丹族 正價五拾錢 郵稅八錢

吉田博君著

(原色版二枚寫真版十二枚挿入)

## 寫生旅行 魔宮殿見聞記

全一冊菊判上製  
紙數四百二十頁  
正價金九拾錢  
小包料金八錢

歐羅巴文明の今日に於て其傳説はアラビアン、ナイトの物語を中古の思想にて實現せるものなりムア族の榮華の夢は梧桐の花の如く散り去りしも其魔術の呪の下に立ちたるアルハムアラはシエラネパダの雪と共に永へに亡びざるなり、著者は第二回の歐米漫遊に於て此古宮殿を訪ひ滞在日久しく其建築裝飾より附近の小景に至る迄具さに之を寫生し且つ口碑に残れる多数の傳説奇話を網羅して其寫生の條下に之を挿入したれば美術上歴史上の讀物として興味津津たるのみならず一似説一奇話のみを取りて之を少年少女に對するお伽噺とするも確かにアラビアンナイトより以上の興味あるなり

●新洋行土産

巖谷小波君著

全二冊新形  
特製函入美本

正價各壹圓卅錢  
小包各金八錢

博文館發行

やまと新聞記者 山本龜城君著

●發行所 博文館●

# 政界の寧馨兒

全一冊 洋裝四六判美本  
寫真版九頁挿入  
正價金卅八錢  
郵税金六錢

篇中十七名或は非寧馨兒もあらんされど概して一省の花形と稱せらるゝ者也著者は英雄崇拜を以て鳴る今其俠氣を叙し英風を捕足するの處筆力縱橫風發の概あり若し夫れ行文の裡爲政を論じ逸話を叙し政系を語り政界の秘脈を巧に機察したるに至りて近來出色の人物月旦にして秋宵燈下の一大讀物たるなり

島田三郎君序 小野田翠雨君著

# 現名士の演説振

全一冊 洋裝四六判美本  
紙數三百二十頁  
正價金四拾五錢  
郵税金六錢

本書は著者が二十年來の経験に依り其速記眼に映したるものを公平に率直に愚憤なく素破抜き演者自身でも己れに此様な癖があつたかと本書を見て始めて覺る位で先きに讀賣紙上で大評判を取つたものを増補訂正したものです本書は演説研究者の好材料たるは勿論一讀本書を讀んだ後で諸名士の演説を聽きて彼是比較して見ると餘程の趣味があらうと思ひます誠に近來にない本です

報知新聞記者 田中萬逸君編

●發行所 博文館●

# 賜天覽 死生の境

前編

四六判上製美本  
卷中挿入寫真數十個  
正價金七拾五錢  
郵税金八錢

本書は明治の功臣諸公が壯時死生の巻を馳驅し而も克く身命を完して報公の誠を盡せる状を自説せる者也閃々たる劍光段々たる銃火を點綴せる生ける歴史は隠れたる無料の好資料を包蔵して完全なる明治歴史の編著に資し全巻に充てる精義純忠の英氣は淫逸なる時代精神を釐革し各自見解を異にせる諸公が死生の解釋は一種の哲理を含めて世道人心を裨益する事頗る甚大即本書は實益興趣双絶せる好個の教訓書なり

# 我半生の奮闘

井上泰岳君編

全一冊 菊判美本  
紙數三百二十頁  
正價金四拾八錢  
郵税金八錢

名家三十名の奮闘談を筆記せしもの存學時代の青年には精神修養の好鑑たるべく生活の戦場に初陣の壯年に取つては好伴侶たるべし

# 我處世觀

井上泰岳君編

全一冊 菊判美本  
紙數三百頁  
正價金四拾五錢  
郵税金八錢

人間生存の根本、最幸福の生涯、堅毅の意思、安固を希ふ者等他に就いて現代名家の告白を集載せるもの奮闘者唯一の指針なり

天城安政君著

(全一冊四六判)

立志の師表  
成功の模範

カーネギー

正價廿五錢

郵税金六錢

發行所  
博文館

古來偉人傑士其人に乏しからずと雖もカ氏の如く身を一織物師に起し曾て一弗半錢の遺産を受くるなく奮自己の正眞の額の汗に依つて巨萬の富を作り而かも之を天下公共の爲めに散じ盡したる如きは眞に稀なりと云ふべし本書は此傳を詳録して彷彿其人に接するの思ありしむ

奥村二秋君 鹿野化骨君著 (全一冊袖珍)

現代名流 實業少年立身策

正價金參拾錢 郵税金四錢

森一兵君著 (全一冊菊判)  
致富要訣 正價金二十五錢 郵税金六錢  
陶朱猗頓の富其富を致すは原あり、ロメシアイルド、ムアンダービルドの富豈亦他あらんや此著是れが原を説く事極めて詳密讀者を指導して正に富の門に入らしむ巨富を致さんと欲するの士は一本を購ふて其秘を知り給へ

本書は現代名士廿五氏が高説を網羅したるもの其の内容は職業選擇の注意早く職業に就く可き否會社商店員の資格等實業少年の是非心得ざるべからざる事項を掲げたり

讀賣新聞記者 田村逆水君著

成功と人格

全一冊菊判 百八十八頁 正價廿五錢 郵税金六錢

東京 博文館發行 本町

成功とは何ぞ、人格とは何ぞ、是れ研究すべき疑問なり、願ふに人生を天地の間に享く、能く其人格の適する所に從ひ其人格を磨き上げ、努力して人格の達し得る所まで人格を大ならしめ、高からしむれば、是れ眞の大成功なり、今の世多くは成功を誤解し、人格の努力を外にせり、此書の記する所、人格と成功とを得るの羅針盤たり、志士須らく精讀して、飄然自得する所あるべし

田村逆水君著

人生と健闘

正價參拾錢 郵税金六錢

眞に成功と人格を著はし好評を得たる著者は今本書を出せり其内容は敢て欺々せず乞ふ一本を見よ

慶應義塾教授 菅絳隆君著 成行要録

正價金廿八錢 郵税金四錢

慶應義塾教授 菅絳隆君著 言行要録

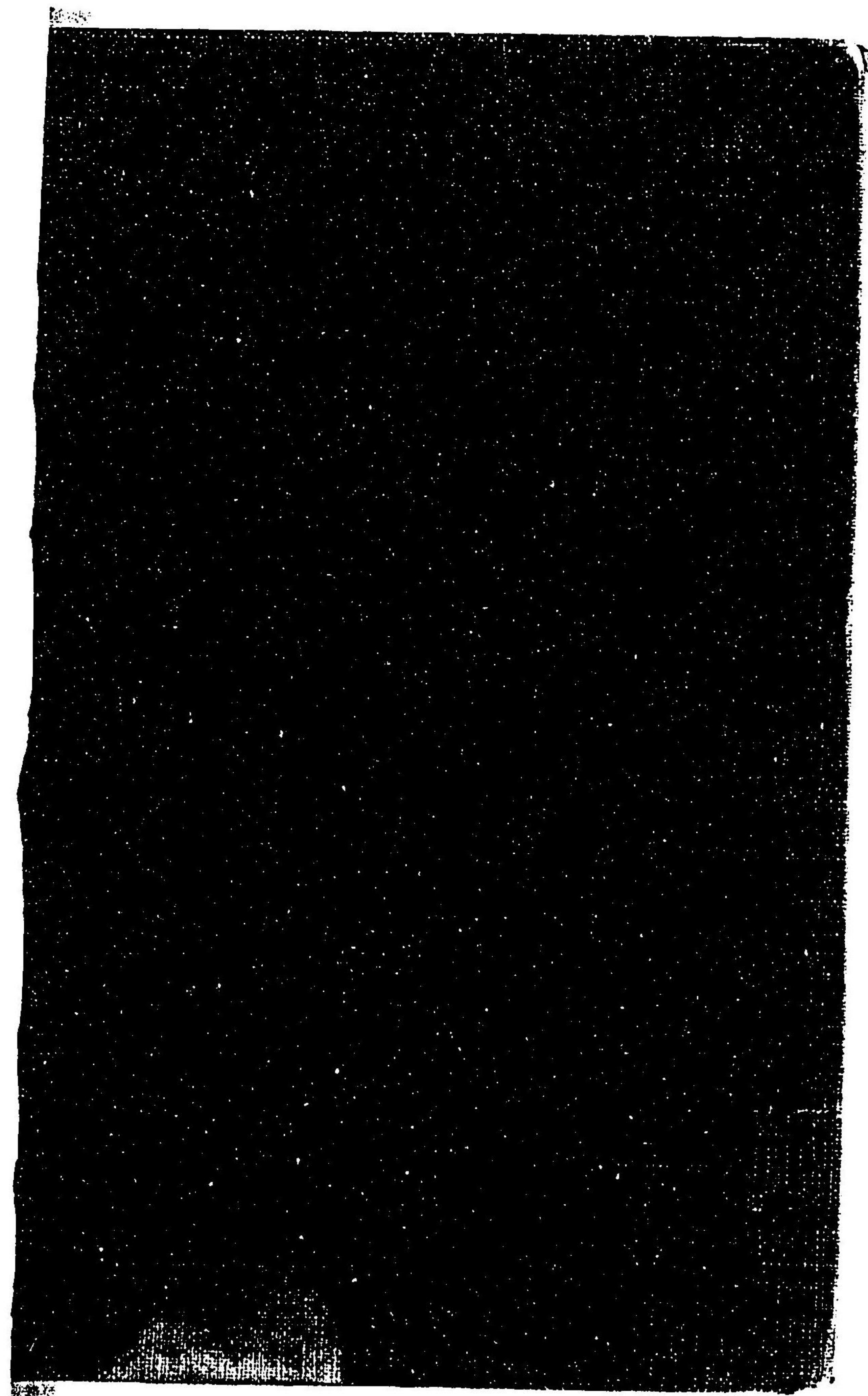
正價金參拾錢 郵税金六錢





27





29

356

Ⓜ

026986-000-3

29-356

珊瑚島探検記

岡 雷平/著

M43

ADH-0006

